

KODAK Color Control Palettes
© The Tiffen Company, 2000
LICENSED PRODUCT



青山御流

活字引種

後篇

多
1412
2



門 3 多
1. 4 / 2
2

藏書

同書

實相院大法主

印

紅枝芳馥高
香帳紫蕊離
披正硯史金

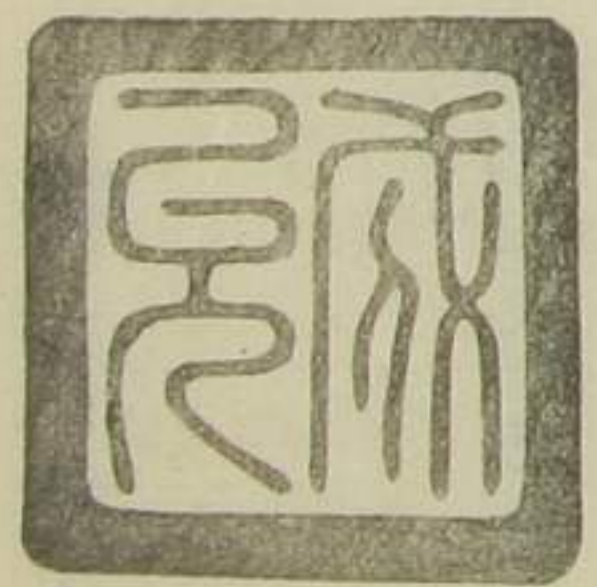
松下流處藏書

同書

寵玉錚春萬
翠色大向風雨
不曾去

癸丑三月廿五日書

義賢



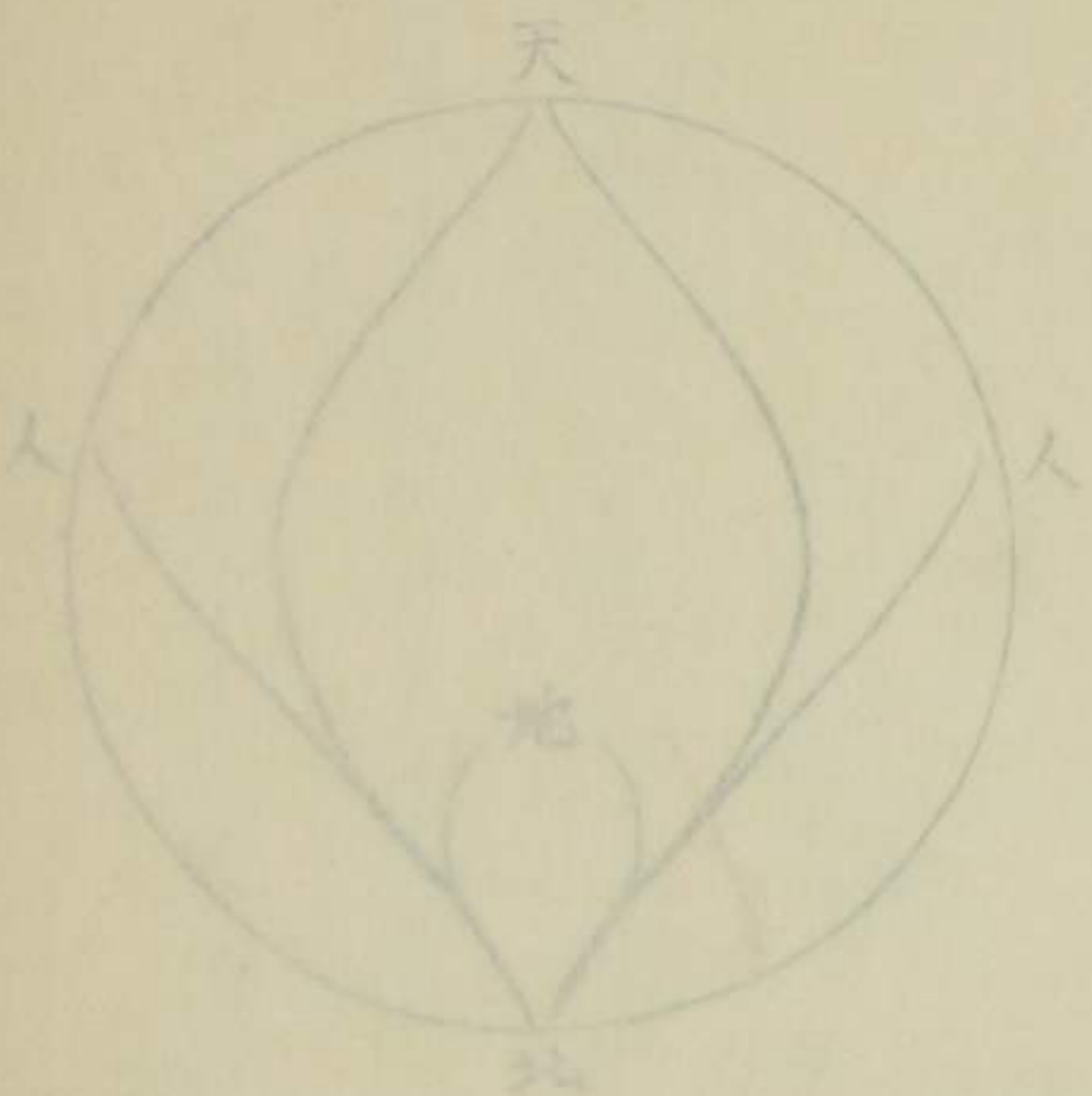
壽余園水谷有雅著

男 錦章亭逸雅校

懸瓶花体本源之事

○懸瓶の花体々本源置瓶の行比花体より變化しつゝ所を以て
 眞の体なく行草のより体なり。故に置瓶の花体を正格と懸瓶の風
 姿を権格とせり。されば大書院床或は貴人招請の節等には必置瓶に限る
 べきなり。又懸瓶は小座敷茶室獨樂等の節其時宜ふより用ふべし。
 尚會席杯少くは殊ふ其集
 列の位置より取合はせり
 轉化をせむは是を學ぶ先置瓶の花を習熟し後懸瓶の花を修鍊

置瓶行之規則陰陽骨体之圖



御當流花体の規格其根元と北を配し是萬物自然の理也故に右旋
 左旋の形状とせり。陰陽の花体は本源と稱す。

此体西南東北を配し右旋の空や
 草木花鳥の形も非勝す
 置位なり此図の取つて置るは
 此体東南西北を配し左旋の空や
 草木花鳥の形も非勝す
 置位なり此図の取つて置るは

男、錦章等遠藤氏

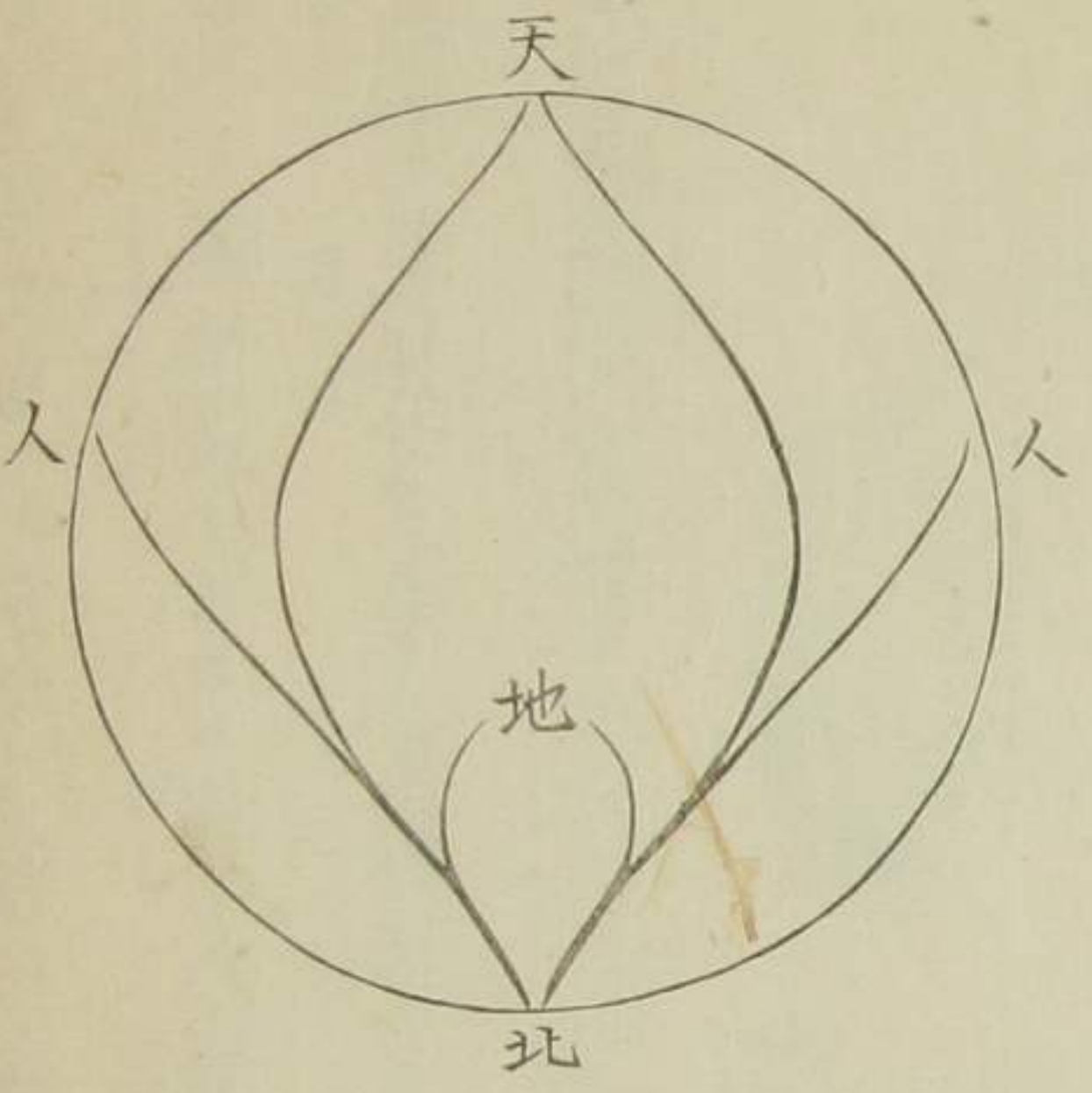
懸瓶花体本源之事

○懸瓶の花体は本源正統の行は花体より分たれり... 正統たる置瓶の花と先... 妙所と云ふものなり

置瓶行之規則陰陽骨体之圖

○置瓶行之規則陰陽骨体之圖

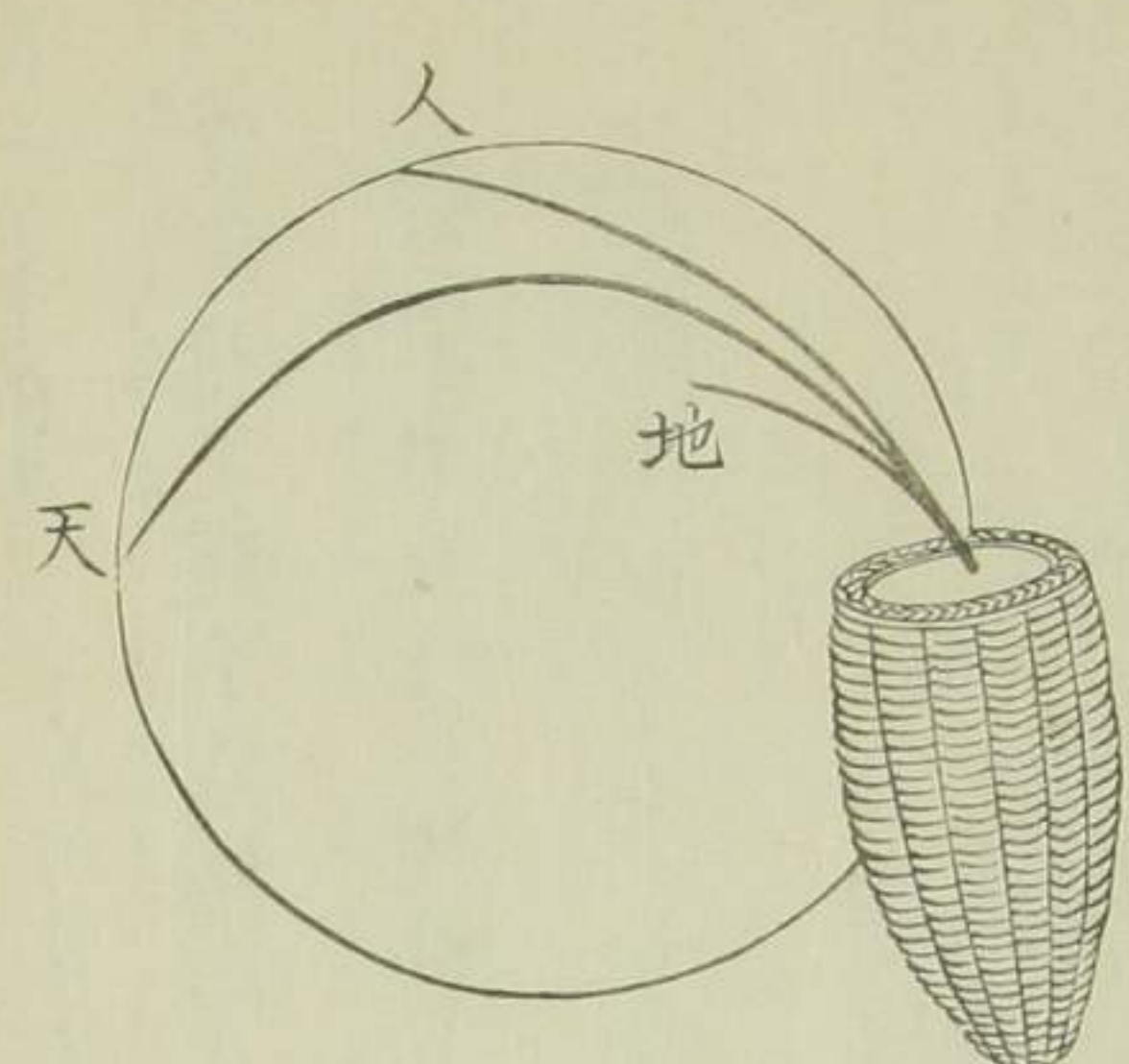
御當流花体の規格は其根元を北配り。是萬物自然の理也。故右旋左旋の形狀をわきま。陰陽の花体爰は本源を顯す。



○活花手引種後編卷之二

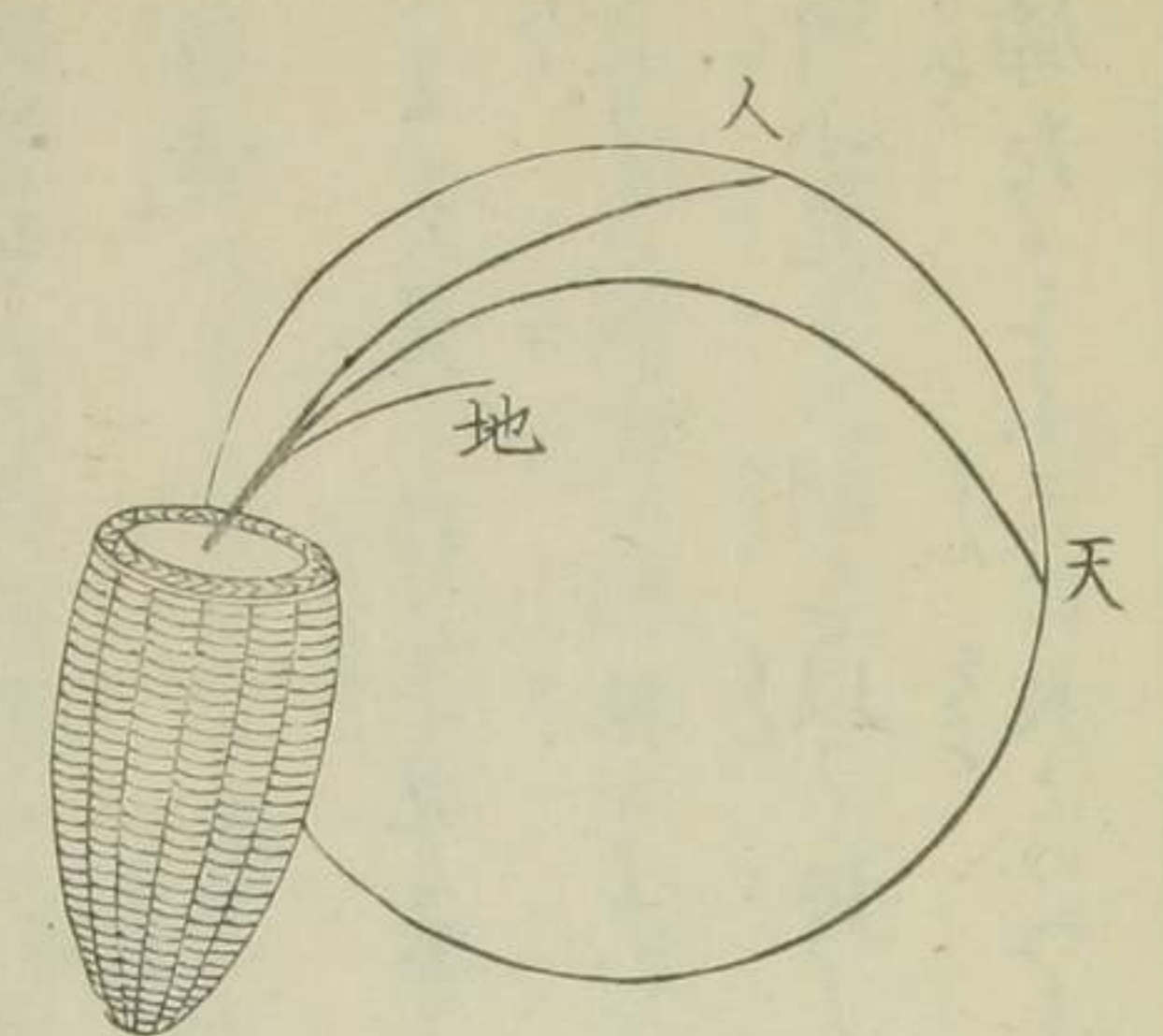
此体西南東北小旋る則右旋の次なり。陰也。草本蔓草をけり萬物非勝手といふ但陰の床は皆此旋の方陰性なり。置位なり。此陰の床より逆勝手の床は事也。此体東南西北小旋る則左旋の次なり。陽也。本勝手といふ但陽の床は置位なり。陽の床より本勝手の床は事也。

右置瓶陰陽の花体と轉く懸瓶の体とを以て是則經緯の理なり。
 是へて天地間ふつと有りの皆此經緯のそれ合離反對の有りのよ。
 置瓶の花体へそなり又懸瓶の花体へぬきなり。兩体則横立の反對と知也。
 また本勝手と非勝手の花形へ順逆の反對なり也。
 尚經緯反對の傳多し
 事繁ては爰に贅せり



懸瓶非勝手之圖
 此体右旋の姿ゆゑ陰也即逆勝手の床を挿する

右旋左旋小体用の差別あり体は草木自然とつ用へ人の視る所とす也体の左旋なるものを
 用り見れば又右旋と見え体の右旋なるものを
 用り見れば又左旋と見ゆ故是と誤る
 りの有今此圖は本体の左右旋ゆゑ萬物皆是
 小等し思ひて迷ふことあり



同本勝手之圖
 置瓶の本勝手を轉く靡か

此体左旋の姿ゆゑ陽なり即本勝手の床を挿する
 水際の振様兩体より置瓶の花体と交り
 かり又花枝の疎密相應し三枝五枝或は
 七枝ふ配し屈伸變化限らざるもの也

凡く懸瓶の花体の旨趣より深山高岳の巖崖をばざらたれ所小
 生成せる草木の自然ふ枝葉と垂と或は鶯わづらの生下たる形容と本
 據し僻郷離屋の閑庭ふ這ひまろくおのほろろ藩籬ふなびき打
 越したる姿なると摸したるものなれば其柄の長じたるを靡く下ふ

有と云。即一體の主枝ゆく是を懸瓶の体ふりて長トたる梢を
 さうく天の枝と稱するなり。それ天を虚空と云ひ又日と云ふ天を上と
 云ふて地を地下と云ふ事。和漢古今の常則を以て天の地を覆
 日の地球と運旋する視動説より云々。時ハ高山を登りて日の出入を
 眺望する。我居所より遥の下にこれを見る。又平居よりて是を眺めら
 横斜に見ゆ。然るに日光漸高く昇る盛大なるの時ふ至りて。何れ
 より是を頂上に見るなり。故に活華の正格ハ此規を則として三才を
 置き懸瓶の権格なり。ゆゑ正格ハ及々日の日光と下を眺む。横
 斜に見るの則を以て規と云ふ。されば屈曲して下を垂と伸く横斜小
 靡たるも。天の枝と云ふ事。當ふ此理ふよるを知るべし

懸瓶行草六体之事 并 變化六体之圖

○懸瓶の花体ハ行小三体草小三体の規則あり。行の三体と云ふは
 相靡載靡逆靡の三段なり。又草の三体と云ふハ大流一惣流一亂流一
 の三段あり。此六体と熟得せれば。つぼみややねがたき枝となり
 とも。自在小花体の調ふりのなり。また懸瓶や竹器銅器籠瓢
 等の數品あり。異形のそれとあれど。右六体の活動と手鍊
 一々花器の相應する所と專一心得なり。但竹器の細き
 銅器籠くべき等。されば左小はるも六体の圖ハ骨法の瓶
 器ハ相應する所の大綱を示しゆのみ。猶草木の活形疎密屈伸
 等ハ花枝を以て辨へられ委し。明らるるがたき所なり。但懸瓶
 の圖ハ早

五編の附録
 懸瓶の先ふりつる如く権格ゆく畧儀をれ正禮の節杯用ふべき

懸瓶の先ふりつる如く権格ゆく畧儀をれ正禮の節杯用ふべき
 ものふりつる如く小座敷の釣床或は平床
 杯ゆく來客多く花瓶床の上居らざる時よきやく二幅對等
 の中央ふ懸花のこも用ひく大畧は事有る其節に登り
 相靡やりの体を挿ぐし相靡の二格をりか此体小限アて三才と
 正格のこも置事深き口傳りり晁祝儀向等小懸瓶を用ふ
 時のあそび此登りの体小挿事やむなり

正禮
 紅透騰脂千種葛

〇登り相靡之圖
のい まやうせい

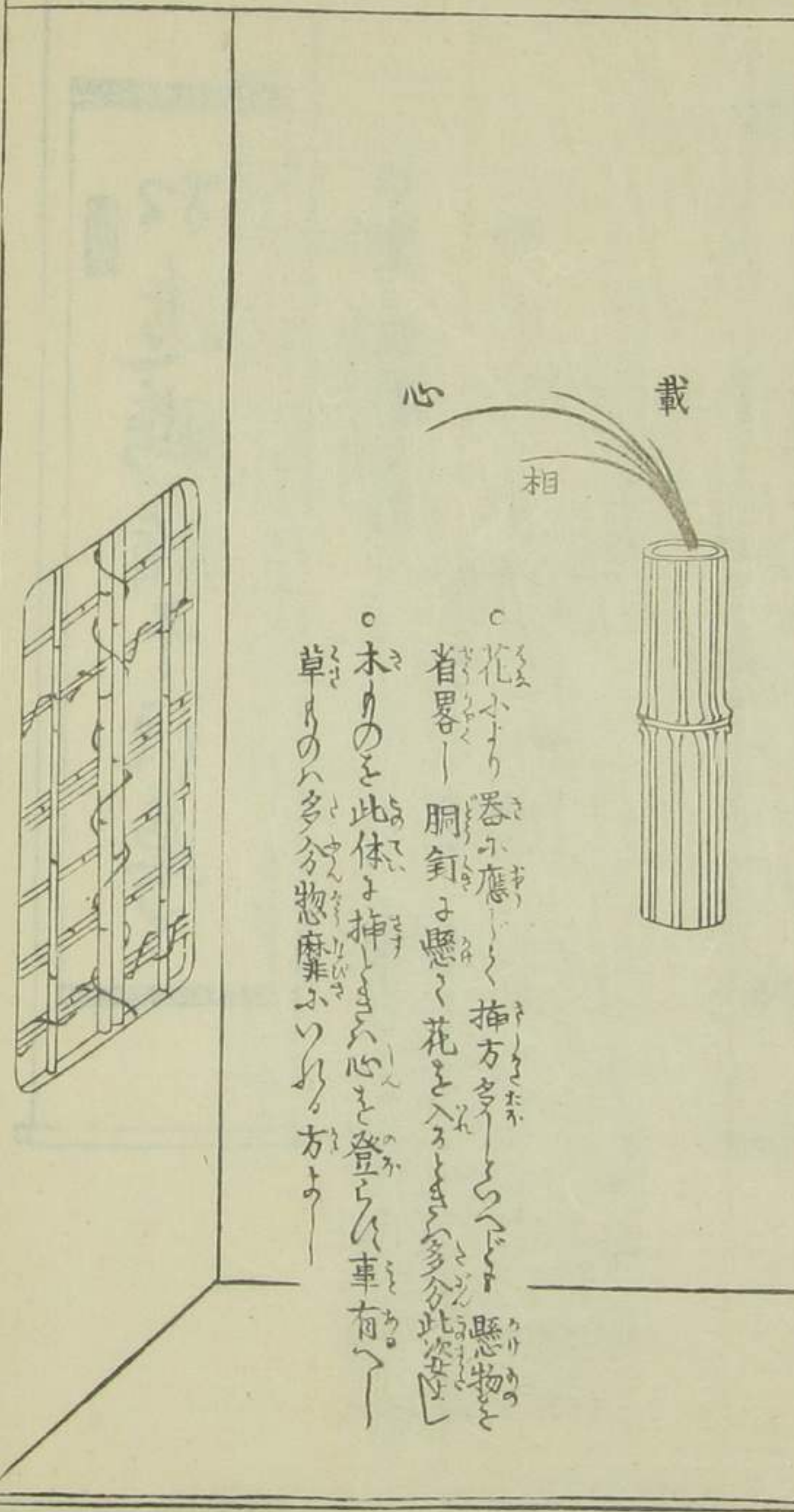


圖のこも二幅對の中央ふ懸
 瓶を入る時此体小限の也
 但懸瓶へ坐て見たり定格や
 見たりの心の乘前へ
 靡く挿更習と知るなり

芳濃錦繡葛枝葩
 喜菜園有雅大

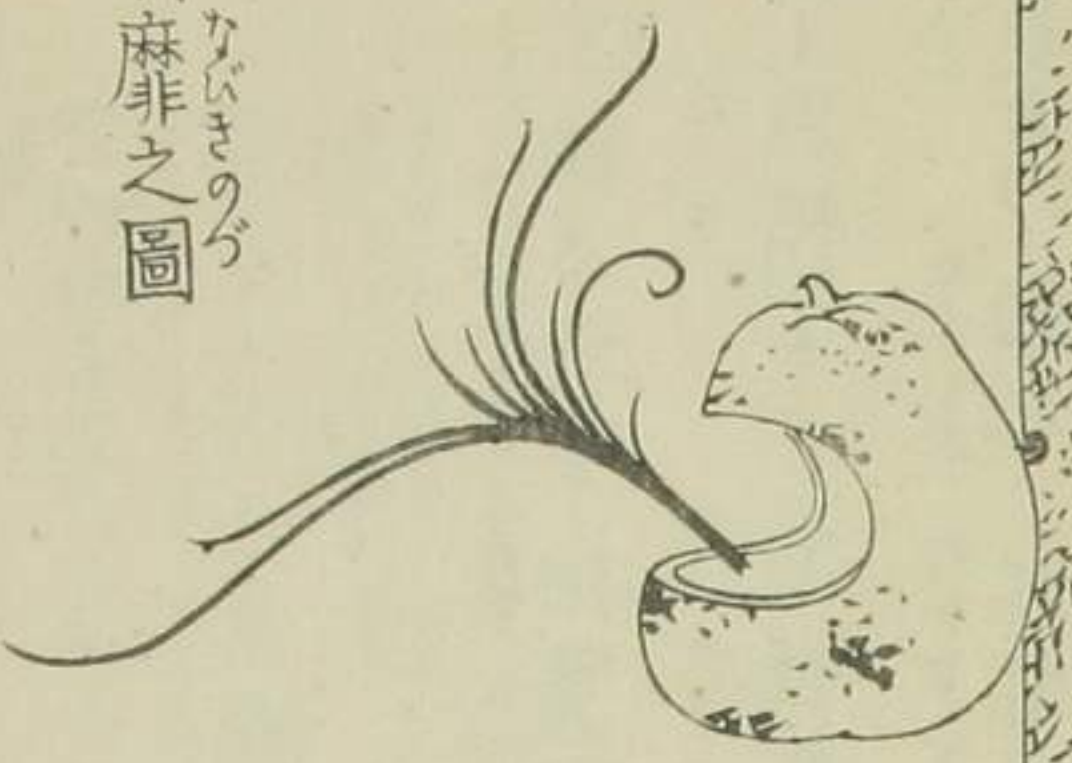
右登り相靡懸籠の内別格あり真通じの体なり故本勝手非
 勝手も置籠の格小准又心の梢正面より見根元小納る様小挿へ
 行の相靡此はさふらふ

○行相靡之圖



花より器小懸挿方多し下懸物と
 省畧一胴釘懸花を多分此懸
 木の心此体挿し心登り車有
 草の多分懸靡ふり方

○載靡之圖

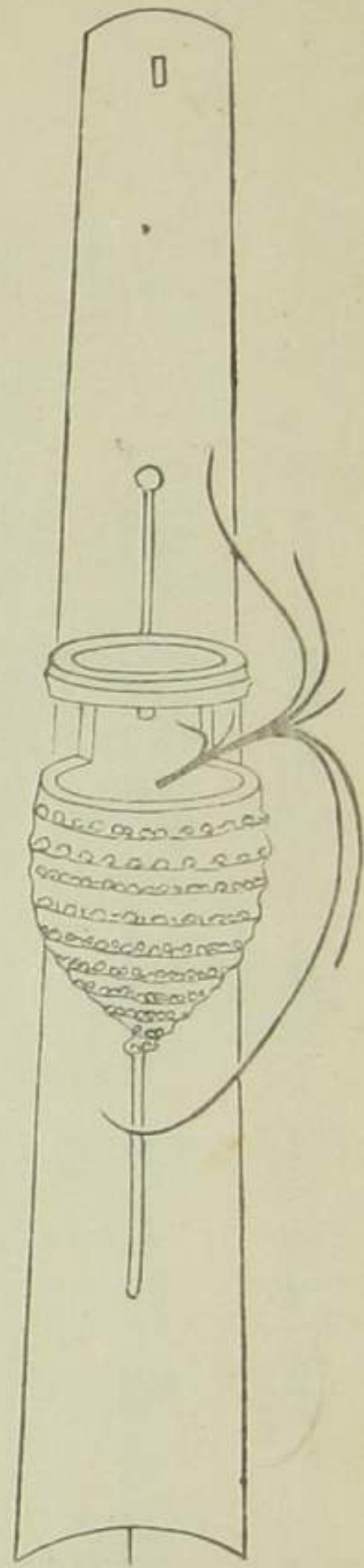


載靡懸籠專要の規格あり木の
 草の共此花体挿し花器大際
 取合ふのなり
 但横懸より正面懸より此骨体小習
 手錬
 山吹萩の類此体小入る風情を

右床柱の釘小横掛より挿し花枝床より前へ出さる様
 心得る心の梢懸る方へ振る挿が趣意を花
 枝の模様より少く前より苦く但床椽と
 限

○活花手引種後編卷之二

○逆靡之圖

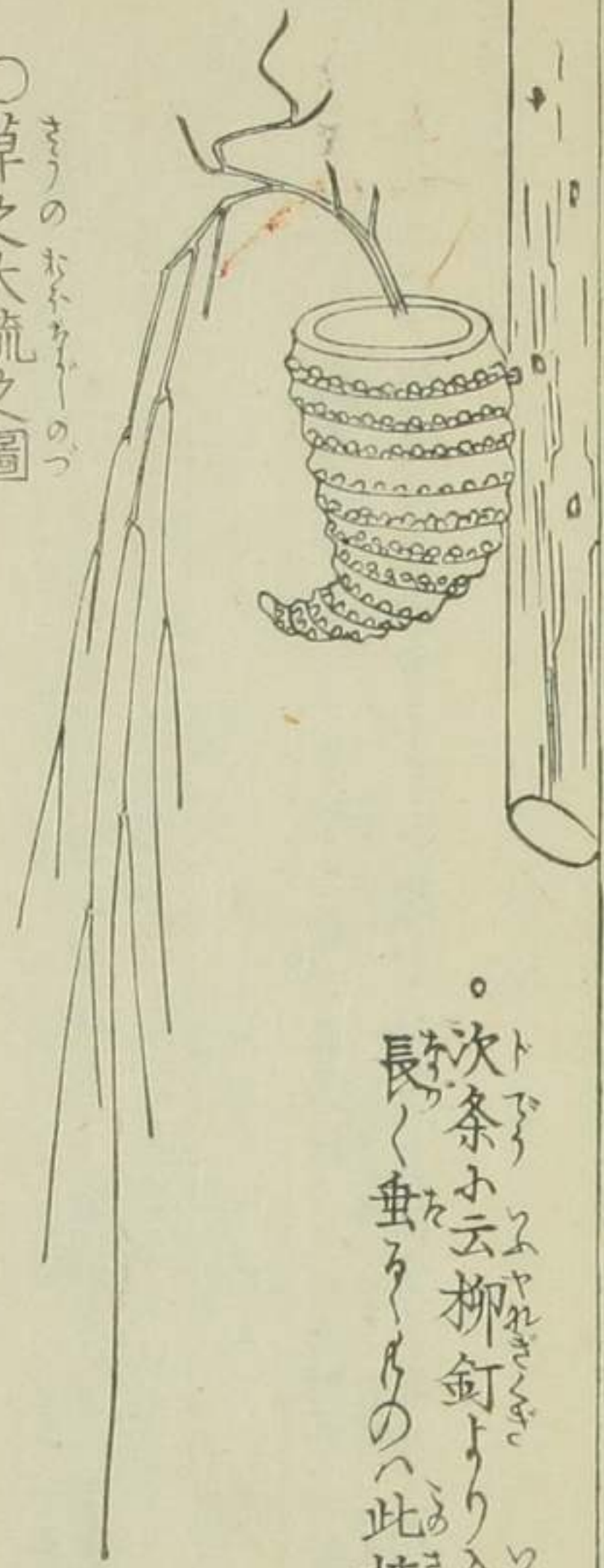


垂撥ト云

此花体ハ長さ姿の花器又口の廣さの杯入る事不取合なり。
 口のせむき器挿く。風情格別おむむき有なり。
 圖より所の垂撥ハ張床又ハ會席等小用するもの也。
張床ハ是非垂撥をくくむむき

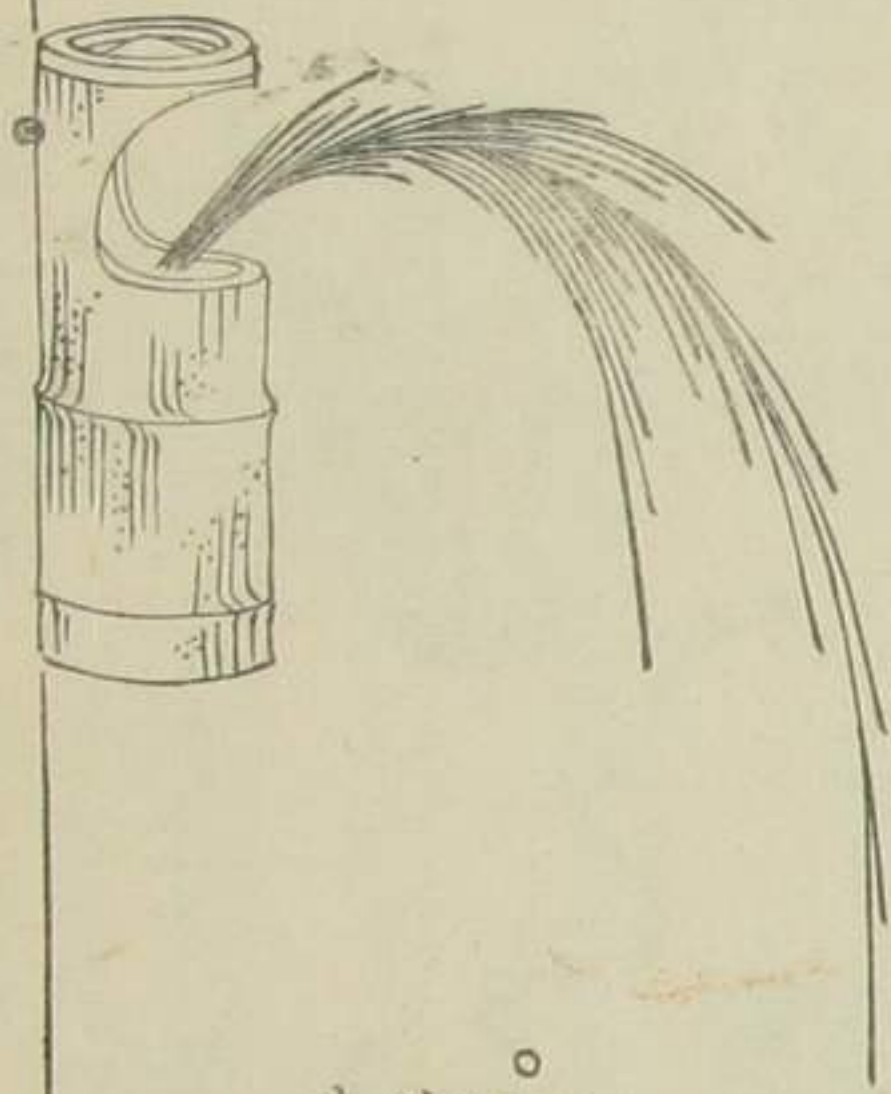
右行の三体并登り相靡等の規則何れ木もの草ものも勢ひ
 ありもの風情ゆく尚性容小應し聊差別有也最此修鍊肝要なる
 なり又蔓もの類凡く大靡のもの次小圖なる草の三体と以て習熟せむべし

○草之大流之圖



次条云柳釘より入たる圖なり凡く
 長く垂るものハ此挿く小准せむべし

○總流之圖



總流ハ前隅隅の間小出枝先
 自然のまじふ靡下り登り垂る枝を
 きこつてなり
 但し自然の曲枝等有とここのの
 風情見ゆるむむむむ

連翹ちやの類

出生枝先靡垂るもの何れ右の兩体より挿く

○活花手引種後編卷之二

但し懸流ハ限らぬ釣邊手插等
 此圖格別取合のなり

○亂流之圖

亂流の体は蔓物に限るなり紫藤牽牛子つる梅いさぎの類
 何れも此風情を挿しし御手附の籠は蔓物のを入るる
 御當流の古傳也今凶きる所ハ手籠の様は是れどもこハ籬竹



とくへるものにて蔓物のを入るる籠
 別なき添く用ふる具也尤口傳あり
 又紫菀等を用ひて
 風情をかばむ有べし

○蔓草の花葉は小葉の花器より
 生い出たるごとく見ゆる別傳あり

蔓物の纏は其本性より右旋左旋の差別あり右図は所ハ左旋の纏
 様なり凡春多し秋分の比まゝ小生長より右旋なり又季秋より春多し
 至り隆冬小衰ゆるもの或ハ木の類ハ何れハ左旋なり但藤は白の花の
 右纏は紫花の方左纏は又羊乳カ右纏左纏のりのりり又北五味子等ハ冬其葉
 凋落し春新葉を生じゆるものハ左纏はれハ各其性を正しく明らめ知る
 べきものなり

右真の相靡并 行草六体の規則二重三重等の器小應に其變化窮

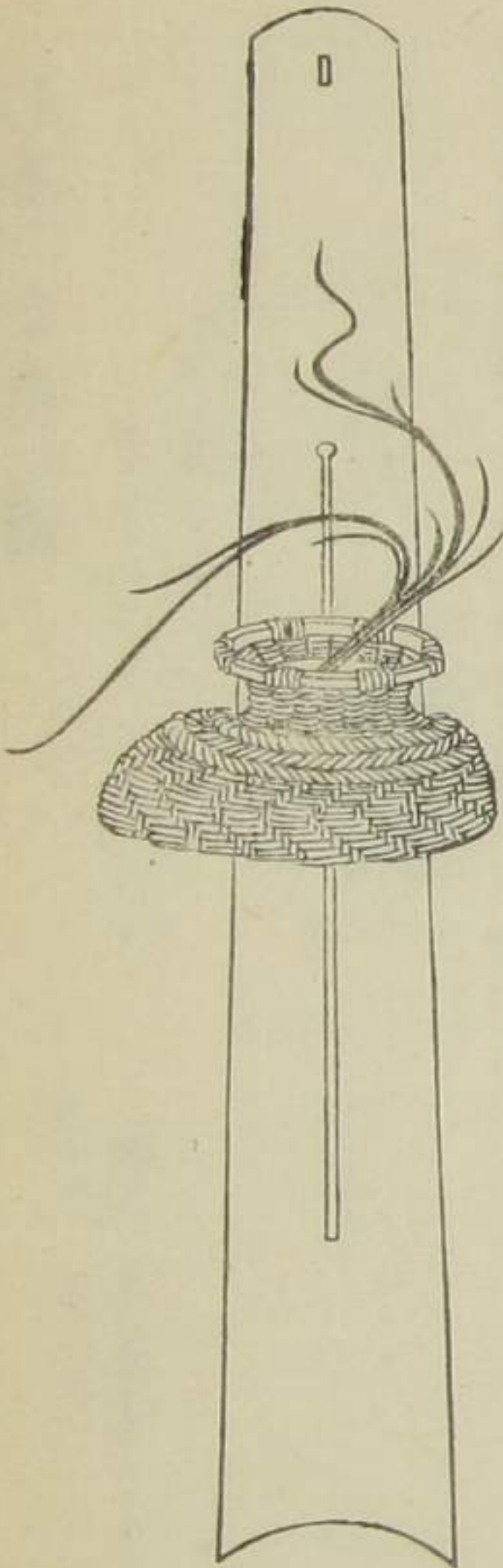
かゝるも猶轉格の準繩とせざるもの五体と左小つるも此十

二体の規則と深く習熟せれば何程異形の花器又難技難花亦向ふも

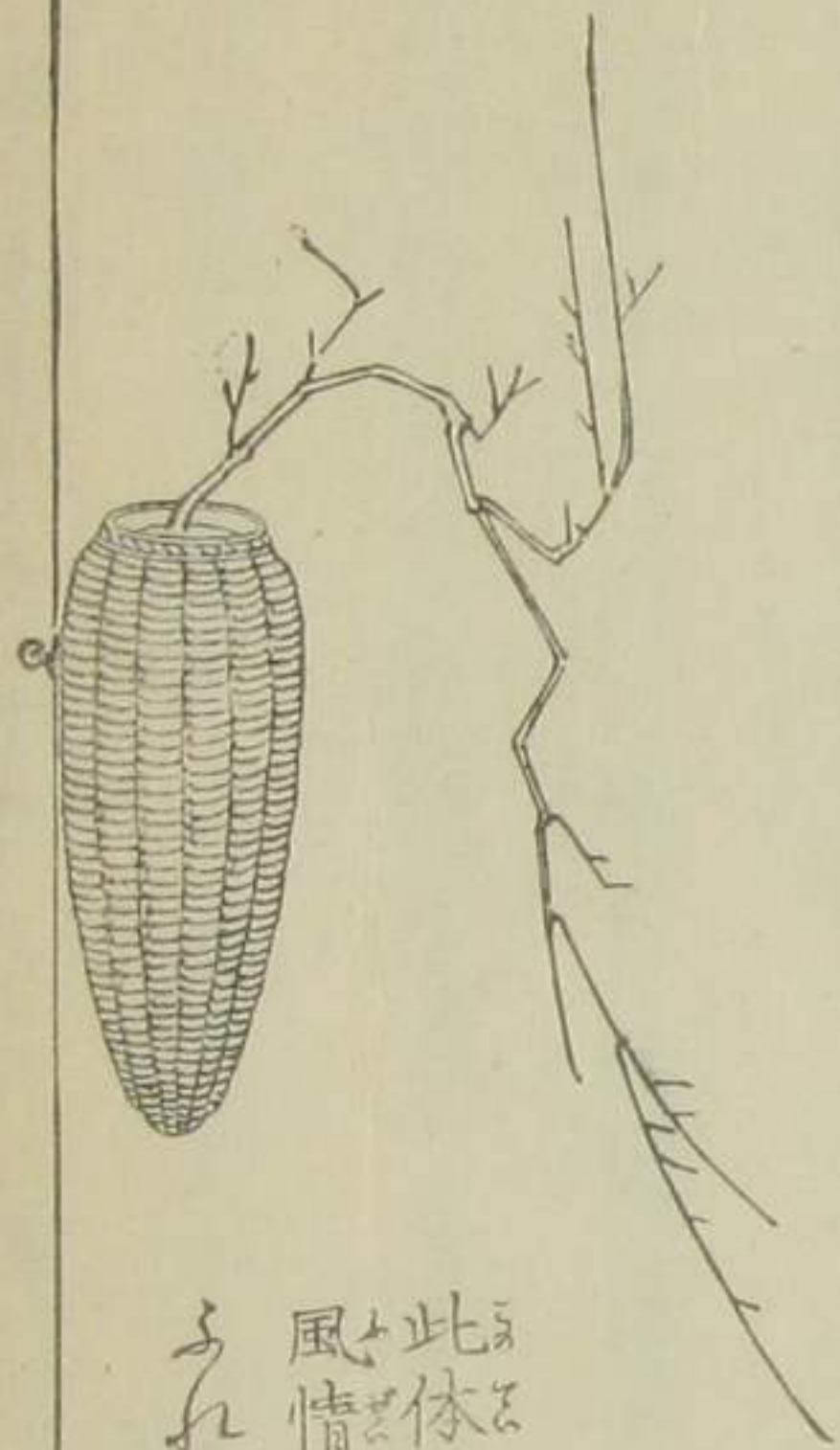
奇活自在とせざるも全くとびの事なり將釣瓶釣船等の趣も大吉此

規格より風情と為す但釣船は出入遠近泊船等の差別あり尚習ふべし
 早作は小畧傳とあり置たればと見え會得るべし

○登り載靡之圖

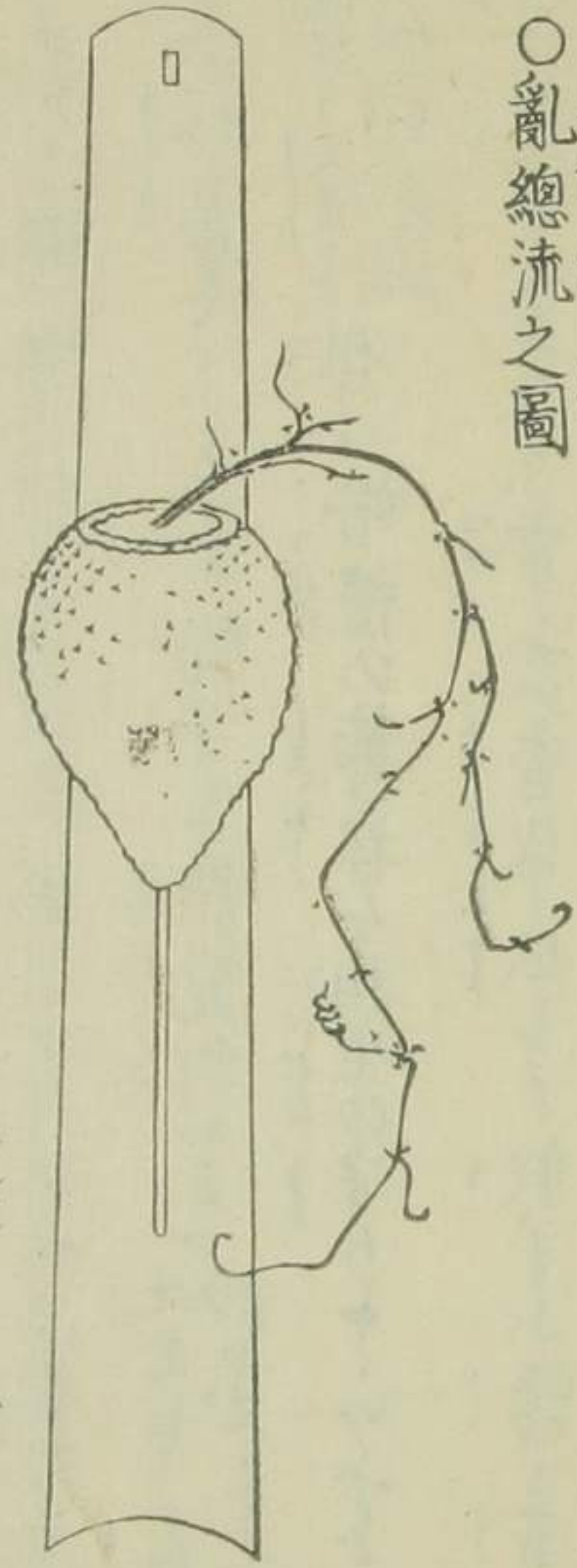


二重切三重切等の上或ハ船の類此花体最



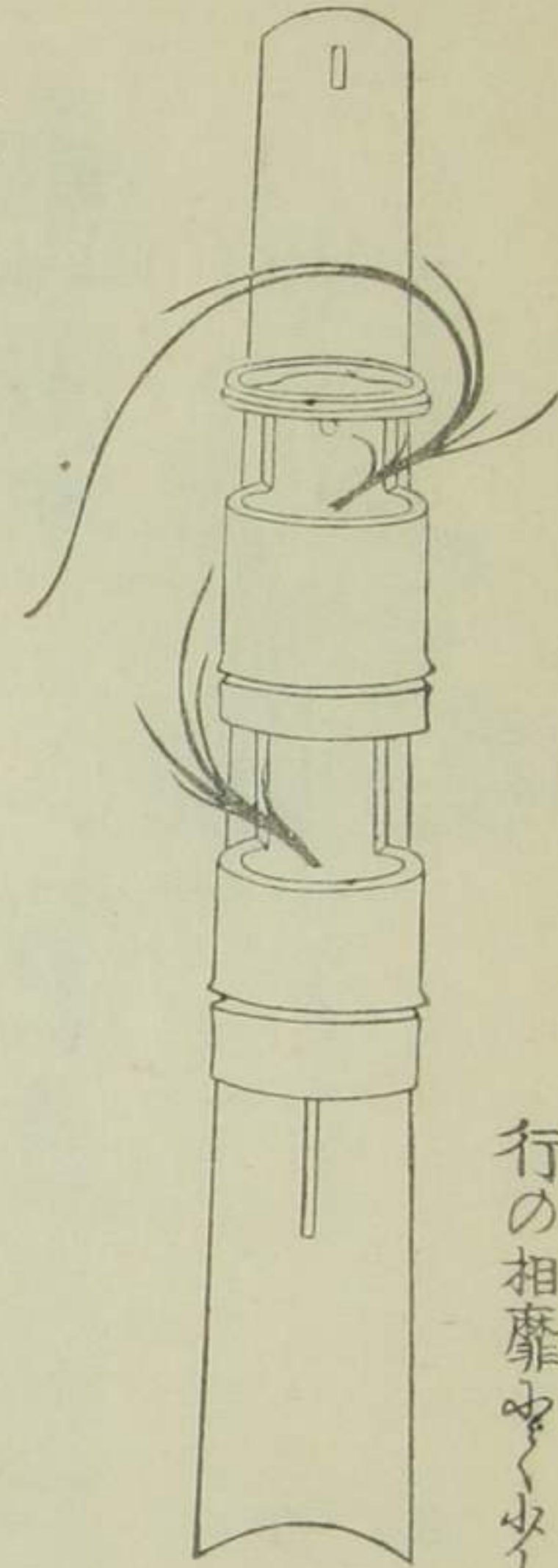
○灌流之圖

此体惣流の体と木の杯や挿時の
風情也水の流を行く物
ふれ灌勢の意や灌流のなり



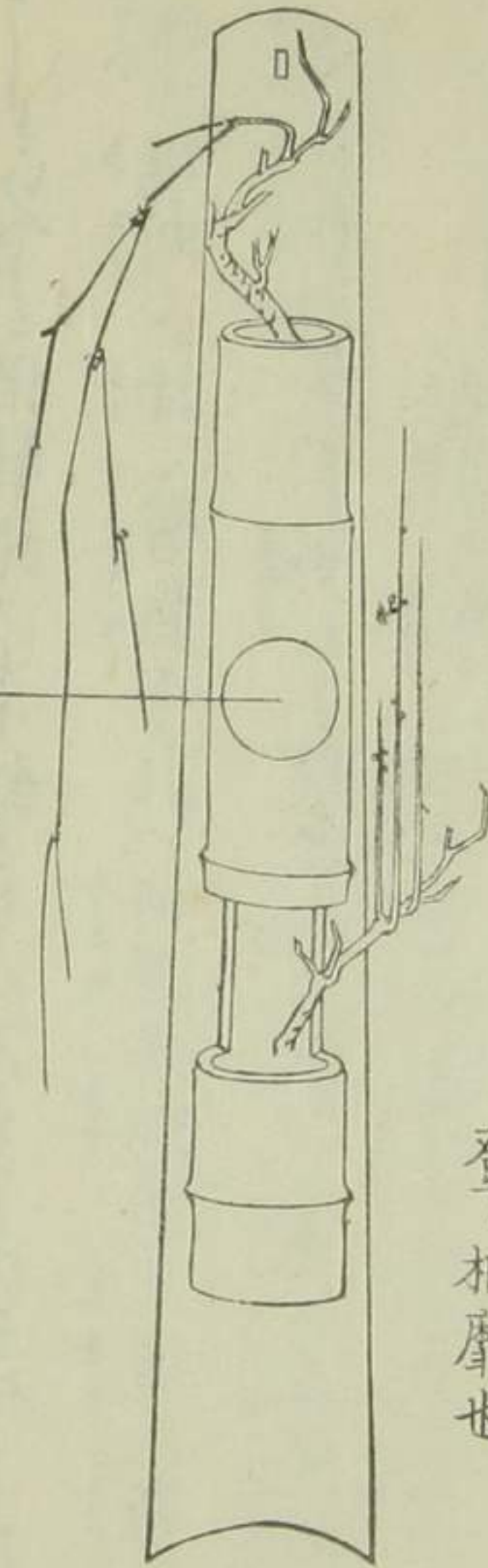
○亂總流之圖

此体乳流の風情兼竹用ひす挿入
姿也尚假枝を用ふ時ハ差別あり



○登り逆靡之圖

下の相靡や少勢したる体也



○登り大流之圖

下の登り相靡也

圓相の中ハ山茶水仙の類と手ごらく約か挿べ

右十二体の規格書院會席等々挿しは美麗を專要とすべし
茶室草庵等々挿しは幽雅の体を顯すべし
是等の餘情と花枝前後のたゞさ等ハ口傳ふらざるに委敷明々
かた。此花体ハ美麗と顯る。幽雅と具する。唯習熟の術ハ有る。

懸瓶之釘之事

○床の懸瓶の定むる釘は中央の胴釘と柳釘の二つの也。今床柱の
り釘と懸瓶の釘と心得る誤り也。此床柱の釘を志し懸る。
客の休息するも烏帽子を懸置釘なり。
此を源平盛衰
の説り又是と。但一婚禮の節杯は相生の守りやうを懸る事有る。
守り釘もやうなり。常少の香体杯も假し懸る事有る。併此釘ハ

瓶を懸る花を挿しは古き事なり。茶室は別て是ハ花器を
懸る事定法のごとくなり。今座敷向ゆく此釘ハ瓶を懸るも
めはちりなり。まはれ書院の床は此釘のちび凡ハ掛瓶の釘や
つものちりなり。と貴人方ハ茶室の外懸瓶を用ひたる事ハ
がれ祝儀向を正し禮儀を正し節ハ必思量すべき事なり。
祝儀の節ハ共。又床脇の上座の方柱ハ釘打事なり。是ハ短冊懸杯と懸
る釘ハ近世のもの也。是ハ変ハ花瓶を懸る事ハ床の銅釘ハ
瓶と懸るための釘也。又柳釘と云ハ靡き垂るものも挿時ハ用ふる釘ハ柳ハ
垂るもの内ハ最上のものなる故ハなすけたるもの也。又朝貞釘ハ有
是ハ利休の物好ハ草菴ハ限る也。此外ハ釣船の釘ハ早教諭の二編ハ著ハ置たる故ハ
も。因ハ云今他家の書ハ懸瓶の花ハ本涼

置瓶の極論あり懸瓶の竹器なり世の竹器一切方の黠法及び其誤り甚しき也
此書院懸瓶の釘のなき二条よりその畧儀なる事の確證を乞ふべきものなり
右懸瓶花体規則變化之傳畢

花配起原并時世沿革之事

附 拋入名義之事

○花配ハ花形物態の締や根元たるをなれば枝葉整ひ
故ふれと最要 瓶花の籍小舉ゆなく其流徒とて是ハ
心と盡とてつまた其的論なるの見ぞ依る當
御流ハ傳ふ所の留方の要と左小著 初學の爲小便をん
さハ花配の諸説まづ古へ冠の并り留たるを起源也
又ハ琴柱を始 或ハ失答の先と折添留 杯其義論多し

何と正と證のなき一家説のや後小附會せ

思ふ古へからる事有ま 余及つ

青山の御家小此説の御傳のや少く炳然なり

其基と古く尊くせん種々の強言のつひをせし活華の御家

青山の御家の外に假し御事や御家の古き御傳籍見え御事

此此拋入や一事の千宗易小田原陣中ゆく葵子花を入る時小柄

ゆ根元とゆ貫き水盤へ投入しより始る 昆附會の

説ゆ取ふたは此を古く辞古くよりそのを精とせ

唯石磊落ふけ置辞小用ひく物をなげ捨る事のみ少くは

有正幼年の比此拋入の義と考ふかたは靡入れの義中花体と

靡入る故小は此のまをけ小通ふとを畧しを転

併^{ちやうじん}今^の思^ひは是^{より}思^はれ^ぬ階^會なりト
かえり花^を挿^事に上^古よりあり

わねや今^のこ^ゝ挿^法の嚴^{なり}こ^ゝわ^ちこ^ゝ唯^手折^{たる}儘^{なり}

鏡^ふり^ら花^の色^香を昔^や愛^玩び^た事^{なり}
鏡^ふ花^と挿^すて昔^の言^に今^の言^は今^今
集^拾遺^集等^小見^をす^伊

勢^物語^也客^の設^小花^と中^昔の頃^{より}手^輕く入^{たる}を唯^俗言^小抛^入さ^る

わ^らわ^らら^るを今^猶つ^ひ傳^へ唱^うふ^事と^し鎌^倉北^條の權^と執^り

未^{より}室^町殿^の頃^小床^{より}の出来^{なり}鹿^苑院^殿の銀^閣小^退さ^る

風^流を好^むた^まひ^しより活^華立^花盆^山茶^香等^の伎^と專^ら行^を

と^れ來^り床^の事^に續^後編^床飾^の命^小委^しと^し又^活華^盆山^茶香^等の^起

御^家の^中祖^の君^との^あこれ^は鏡^花の^法則^嚴ふ^ちり^り活^華や^抛入^さる

二^稱も^出來^る事^のな^りと^し古^へ花^配と^して^今の^文人^風杯

い^つも^しも^小挿^入たる^やと^しま^が一^文字^叔等^を用^ひ

留^たる^事も^有り^なり今^茶室^の花^に花^配と^し古^へ挿^入

故^ふ猶^抛入^れと^唱う^る此^義也^今の^世に^諸事^礼義^嚴ふ^ちり^り

設^きる^事に^抛入^れ唱^うふ^事に^花配^とし^茶室^の花^とし^口

廣^き器^ゆら^一文^字を^用ふ^事に^強く^花配^する^事の^起原^をと^し此^一文^字

根^元と^いふ^事に^古へ^花配^りな^事時^に折^入れ^とし^根元^と折^留

此^一文^字より^十文^字と^し又^換へ^り叔^等と^し松^葉配^り

漸^元祿^寶永^のと^し寛^政文^化の^頃迄^の

事^ふか^んひ^りと^し

留方圖解 并花配用様滋器心得等之事

〇活花手引種 後編 卷之二

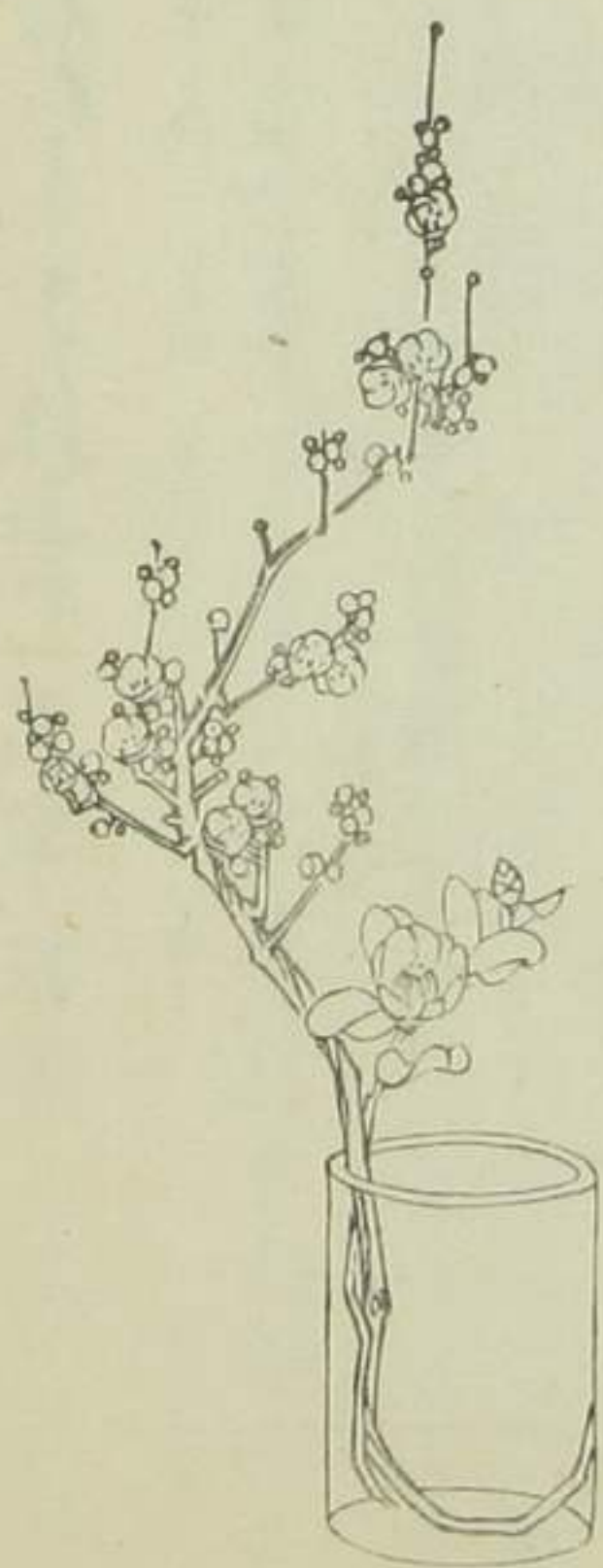
○文雅 鏡花之圖

今俗より文人風の挿る也、そのへの質朴なり、体大有



○折入 留之圖

折入れは他所々花所望
せしむ節圖のいさ花
器々々花配を留りかき
時杯を用ひて即奥と添る
事ひび



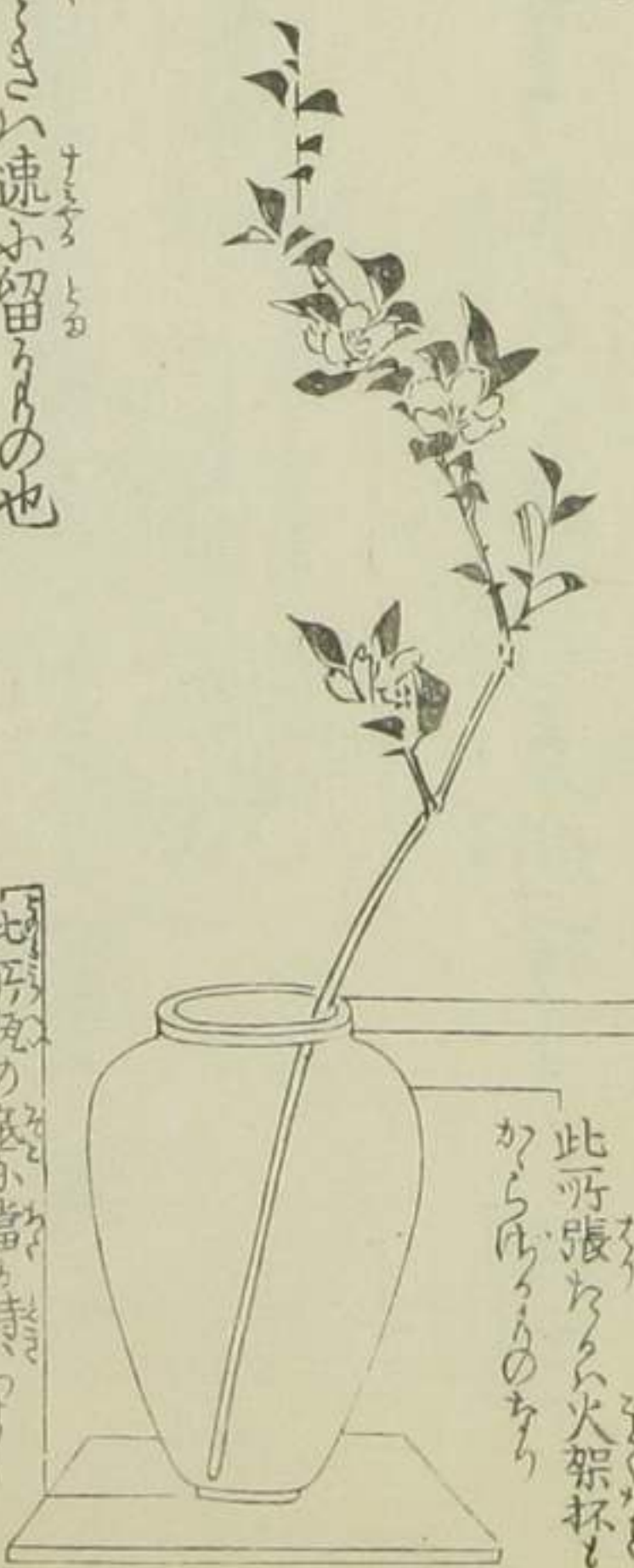
○此折入は強し留るなり
但添枝二本より餘り留るなり

○花配 ちり 抛入之圖

配りちり 留るふの圖
ニ夕所の持合
木木を留り其餘
是小添せし留るなり
掛花の類もぐ器の口
ひらり野や前靡せし撓置し速し留るもの也

○一文字 留之圖

圖のい口の廣きもの
一文字を入し留るなり
是右の花配を留り
り同意なり但一文字と
強く斜に撓



此所や前撓る也

此所は配りかき
此所は火架杯
かきけりなり

此所は底ふ當り時
留るなり但小木の底
留るなり

如此一文字を斜に
用し時ハ留るなり



圖のい口の廣きもの
半月留るなり

○十文字留之圖

右の十文字より十文字と換る事
まぶく世ふひるもの自立
なうけの理ゆく必陰陽の合
成就るをなれ此十文字ゆく
たかふ留まり



此十文字ふまた後より一文字とわけて留る事
扇留やうふたり
但扇留は青竹と
以て製るべし



水仙抱入きの風情なり

右十文字轉しく杖をかり其杖小廣狹の差別有り根締りの
丸くかりゆく前後ふらひく留るもの二品有りなり

○杖ゆく丸く留たる圖

杖の内を杖を女一づつ
用うれ留るなり
併これの初心の
たれ



○杖ゆく前後ふらひく留たる圖

配る花留
根締りト又花配りト云



杖の木をこのかきさきの又まぶる
もの杯耳まげ木槿の木をよはし

右のいづく年より。花配漸備すれば亦是小附會をなす。籠
 中を五行小配し。其外種々の理をそへ。或は籠の傍より挿又ハ中
 央小挿四候小挿所を換ふ杯の強言をトせり。是皆正しき
 傳へたるは。也。今 御當流ゆゑ松葉配す。板とす。たへ配や
 づるを専ら小用ふ。此松葉配のへん。V 圖のいづく丸木を割懸く
 松葉のいづくひきき用ふと云。但し松葉配は千代の緒やれをかく。又
 圖のいづく割懸く製したるを琴柱とす。と前を結びしむ事なり。
 此琴柱のいづく御當流ゆゑの好し。是を用ふ場小至りてハ則板を
 遣ふなり。但し松葉配りの割懸くものたれ。留す。板の丸き枝なる故。たれづ
 留りたるも配りおあり

松葉配めく留たる圖



此配りの木は木槿や歴木の類まへく木理の通るたるものも撰く用なり

〇松葉配りの多く向ふ附也。但し花おとりの隅附を遣は

又ふたへ配す。いづく板の此いづく三條たるものより起す。いづく
 凡花配りのけしき。はまぐ。はね。古義を失ま。いづく殊小留す
 安き。いづく配す。小次りのいづく也。但し。製様の筋のよ。く通りたる木を三ツ
 小割く。即二筋小花を挿なり。尚。の製や。口傳り

三桎ゆ留たる圖

三桎ゆ留たる圖



ふたふ配りてつた我 御家の先君根留りの伎ふ深く御心を尽し
 給ひてめく此配りの製を考興しめいしなり其後別々當
 御流に専らと用ふるにふたふなり 但此配りを用ふる小功なりしむ最
 多しその木と草を取合し挿ふ必此配りを用ふる時水際の差別
 殊ふき立立しむるにみゆるの也又花をちやむ留り安き自然

養をたけけたる古義ふ叶ひ根締りの美麗を顯し等餘は猶此配りを
 手錬し其妙要を會得しむ 但此配りへ枝數多く挿時小用ひ以時ハ松
 葉配りを用ふる

二重配ゆ留たる圖

此配り二筋なるゆえ右の方へ挿枝ハ
 右の木肌とす

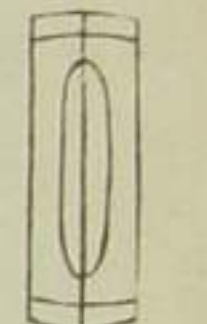


此二重配ハ草木
 とも數本あり
 自在に留る也

左の方へ挿枝ハ左の木肌と
 するなり

近世右の二重配りふ據り溝配又藥研配りといふやちやき配りとは

この溝配りたるは、かくの如く製するものなり。薬研配り



此は丸木を割く上を廣く下を狭くして、中小竹木

或は鉄のうへき板をばさみ前後をけりて縛り、是は根元を削り

一本は挿りの也。是は配りの本来を失つものなり。溝薬研等の名を肩せ

たるは、いさひごとく也。配りの前後を縛る。瓶史の忌以繩束縛や

いける根を縛りたるは、同じことなり。是等の配りの假りや、用ひし

事ぞか。猶此外箱配りたるは、同様の製也用す。又引配りたるは、丸木を

鋸と以て引切その細き筋へ花を挿るの也。拙しきも、薬研配りたるは

御當流より右の松葉配、杖配、二重配りの三等を用ひ

其餘古義正しきものを用ひる事なき也。又相生配りたるは、有是は、婚札の用

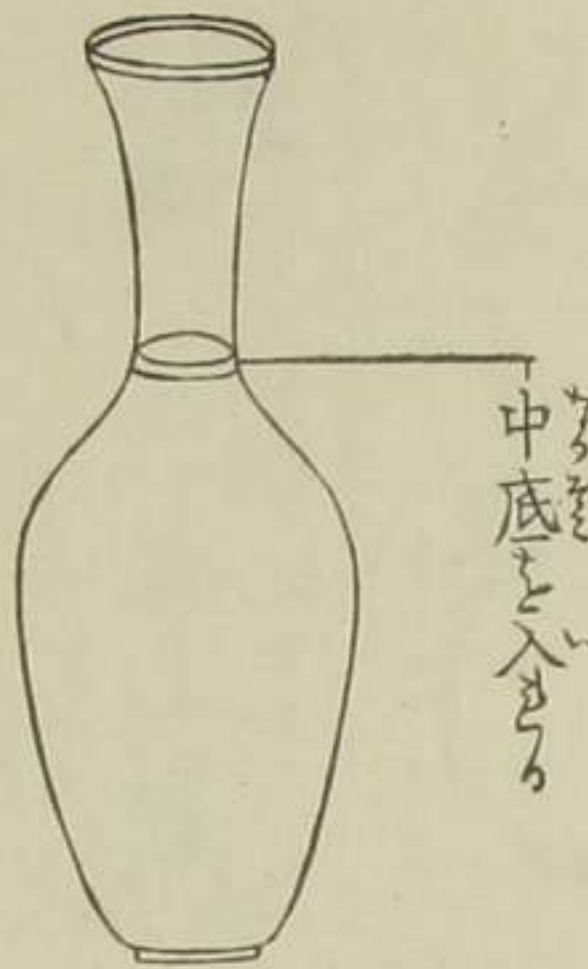
留りたるは、此相生配りたるは、右の外種々の配り何れも、大旨是等の配りたるもの也

〇九て花配り花を留るの要あり。花体は應に器に應じ、その

留り様一定をば、程花体と云ふものなり。根元留らざる時々

その功全かり、されば前より留方を常々克習し、深く心を盡すべき

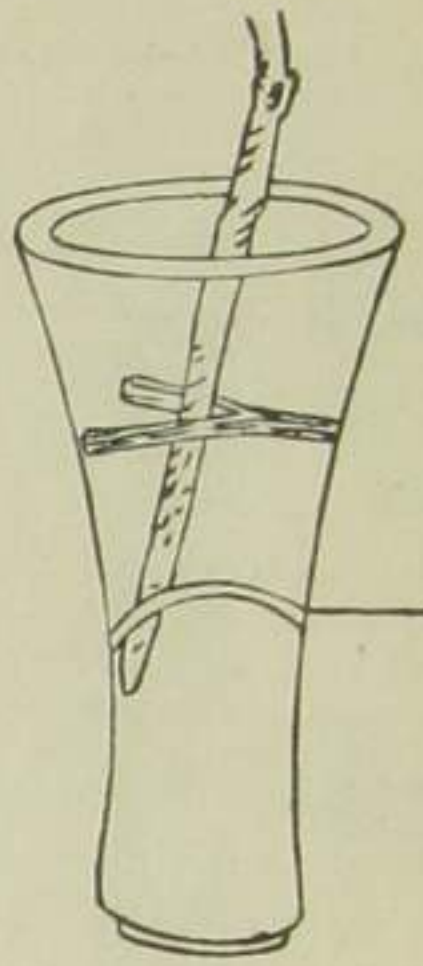
也。尚又幼學の爲に留りたるは、磁瓶の差別を聊左に附録す



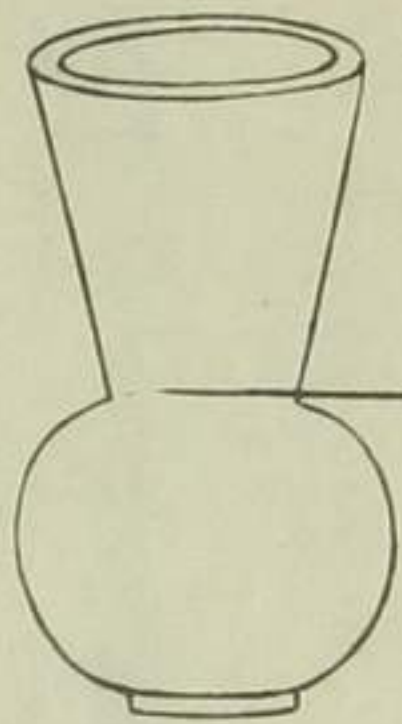
中底此竹ゆき、製し落し入り用なり

〇活花手引種 後編 卷之二

圖の如き磁瓶に花配りせりて留りたるは、陶器に應じ、その留りたるは、底逆花と挿るに留りたるは、丈長きものより、ゆきか、尤草木も、小ふり、ゆきか、手から留りたるは、大ふり、ゆきか、手から留りたるは、此時の圖の如く、瓶中小中底を入は、是に當り、入る時、速に留るなり



無悶人を用ふ時此所迄落し入る遺さざり



又陶器のもの本蕪し青磁の作尤多し

杖の重しと文字やく押つるなり

圖の如き磁瓶もまゝ留るが如し、杖やく留る時の前圖の如く中底を入るべく留るなり、又二重配りゆく留るは中底小限らば一文字を配るの下へ入るべく留るなり、まづ配りの如く留るがなまゝの一文字やくよく留るものなり、

圖の如き器の前編み見えたるごとく薄板を落し入る哉、又口のひろき奥小圖なる無悶人を入るべく留るものなり、

まづ底のひさまたるもの早はやく、初編み著したるごとく薄板を落し入れ配るを留る事なり、

磁瓶或は竹器の類内の塗たるもの配りまづ留らば、締賦木と前後ふ當り配るを収むべし、其締賦木は今西洋舶來のコロツフヤつるもの甚よし、

右の外方形の花器も杖を用ふる事なり、松葉配りも留るなり、但し銅器のものかた配るを入る損する事なれば、松葉配りゆるす、唯陶器はまづよく配るが如きものゆゑ、杖を用ふる事なり、又塗たる花器も右の締賦木を用ふる哉、或は前後小紙を當り、紙を當り、また薄き板を當り配るを収むるべく、かくれば、留るべく、留るものなり、

平鉢水盤等の瓶中留方之圖解

〇活花手引種 後編 卷之二

〇水指小火架留之圖

火架ひかみく留とどるの一文字

少すく留とどるを

同おない意い也なり

圖ずのこ根元ねもとの當ありの

火架ひかの輪わふ當ある所ところの呼吸こきゅうみく留とどる也なり

右みぎ々々火架ひか二ツふたや留とどたる圖ず也なり

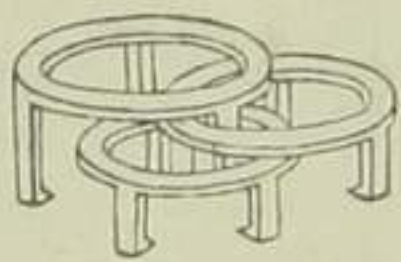
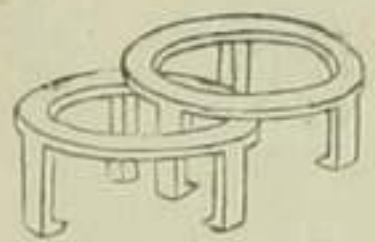
猶なほニツふたニツふたと圖ずのこ組合くみあり

遣はなふ事こと有ある

但たゞ一いっ々々々々夜學やがくの具ぐ

中ちゆう事じハ早教さうきやう

論ろん出いせり



太おほき木きのこ火架ひかの圖ず
留とどるの



〇蟹留之圖

蟹かにの足あしを器きのこ留とどめる

留とどめるなり、向むかふ懸かり

又また横よこに懸かり事こと

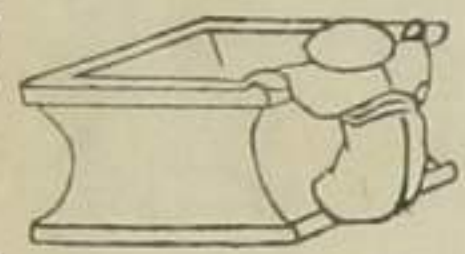
向むかひなり、時とき宜よろしく随まるべし

蟹かに陰陽いんやうの置おきたる早はや流りゅうみ

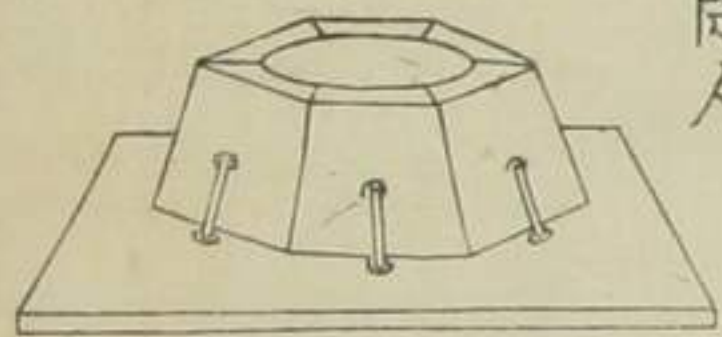
向むかひに懸かり

〇一閑人無閑人之圖

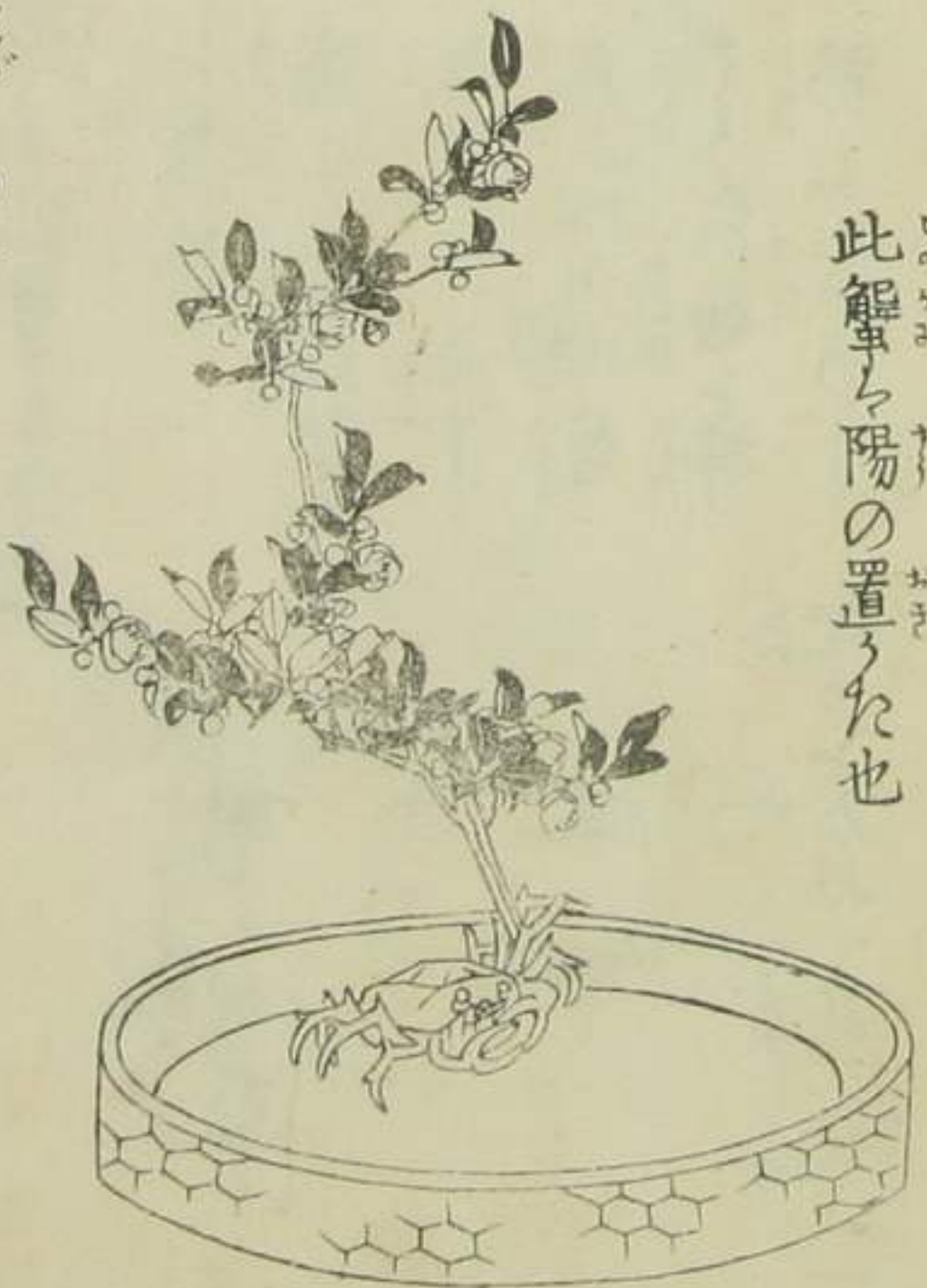
一閑人いっかんじん無閑人むかんじん



一閑人いっかんじんのこ墨臺すみだい也なり



此蟹こかに陽やうの置おきた也なり



枝えだの屈曲くつこく

より變化へんがはれる大旨たいし圖ずより考かう弁べんじ

太おほき木きのこ杯はいに配はいり居ゐるを考かう弁べんじ

圖ずのこ板いたに仕し込こみ紐ひもを留とどめる也なり

井いのこ閑人かんじんを故ゆゑに無閑人むかんじんといふ

○無閑人ぞ留たる圖

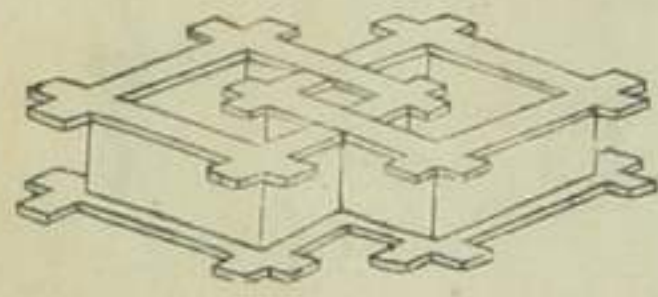
幹ふらむらんの留るる
圖のこゝ木肌と切り

こみく収むる、
但根の杯を添ふる

この幹の根留りふ配をいれその配りふ
根の杯を挿へたるは留るるの也

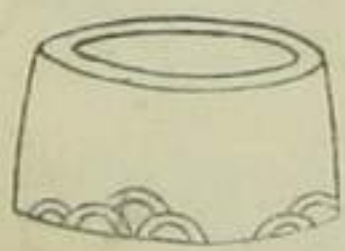
○双井筒

なび井筒は
ふと蘭の類
の水草と挿折
小用ひくよ

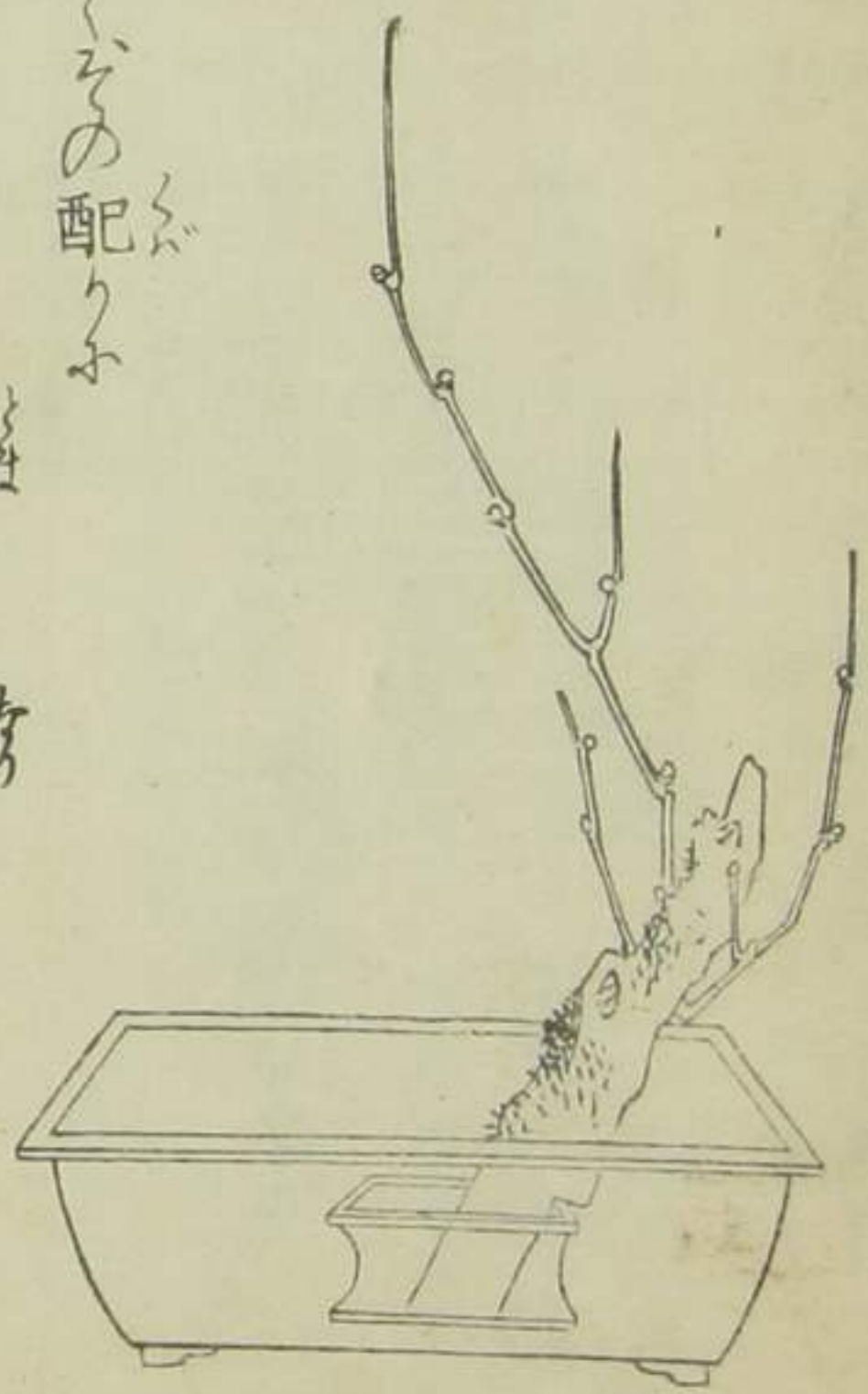


○筒井

筒井は取扱ひ
無閑人ふ准
用之但菊
の類と挿
節々常のこ
配り入れ花と挿



大小の花
應に用之



○唐留之圖

唐の組方ハ早教諭
出せり、
留るるの隅懸く
安き也但唐ハ組方小

○環旋水留之圖

瓶の中より挿事有也



此所砂鉢の隅懸

環旋水の穴を本
二本或三本挿也



環旋水ハ水草の類を留るふよ、
詰りの杯込、
根元を少折挿へ、
流る事、是を折入れ
の法なり

右花配留方之傳畢

○活花手引種 後編 卷之二

右花配留方之傳畢
鉄留破利留等ハ早作
小著、
花枝を以て手鍊
は、
是を折入れ

二木三草五葉之辨并准種之事

○草木稽古專要の前の前小桂月園泰雅撰二木三草五葉と
 擧たり其二木三草といふ前編小見えたる梅山茶の二木菊葵子花
 水仙の三草といふ五葉といふ一葉玉簪花素吾胡蝶花萬年青乃
 五種といふ有雅これと研究とす二木三草は尤修行の肝要とすべきの
 かり五葉はいまも盡さる所有なりまづ五葉の内玉簪花と素吾の二葉は
 准ざるものなり胡蝶花は花はやや鳶尾等小類一葉葵子花は准ざるもの也
 此れ一葉萬年青とす青と手鍊とすものなり此二種の四候より生
 榮えく最世ふ多きものなれば専ら是を習熟し餘は此修行を以て
 推せし又葉を青とすものなり常盤木竹とすもの水草の類猶多し

その同類別種の差別と辨置其主たるもの専ら手鍊とすものなり

○紫苑玉簪花素吾是等一葉は准じ何れ葉を組む形態

を調ふものなり 車前をひの草の類葉と組むものなり種類あり

又曇華芭蕉紅蕉鬱金逢我茂高良薑良薑等同一く

をんふ准じものなり是は一葉の葉を組む体をわけるものなり

○萬年青は品位餘種小秀く性容是は小類なるものなり

○常盤木めづる松と冠し五鬣松は准じもの最多なり華陰松

栢扁栢檜栢刺栢植椈栢榎伽羅木栢の類何れも松五鬣松

の意を以て修行とす 尚常盤のもののみは矮檜等性容は異なるものなり是等葉を青とすものなり今牧草

花を用ふものなり數種あり 今牧草

○竹々一種別品ゆく淡竹 苦竹 孟宗竹まゝ 金絲竹 人面竹
蕩竹 紫竹 鳳尾竹等の類その差別有りていふも 何れも葉の疎密
小よるる風情をなす也尤竹の修鍊を以て草木小其枝と及ら
りの數種有り

○水草の風情は別格ゆゑ蓮萍蓬草を以てその主とせり

澤瀉 薺草 一瓣蓮の類是ふ准じく性容を調ふのなりを

水草の種類多しゆゑ葉を以て風情をなすものなり也

さくら今此五種 竹 常盤木 薔古の專要ふ備ふ 但 蘭

吉祥草 山蘭の類 芒 荻 荻 荻の類 此小次 此外常盤木小ほく

萱草等何れも蘭の類 何れも芒の類 又櫻欄ふまの類其

性容別ゆゑ葉を專じくするもの有りていふも 右五種を
修行する時おのづから自在を得るものなり

一葉本性陰葉陽葉之事 組方之傳
附 准種五草之圖解

○むしん本勝手と非勝手の風体ふより先第一葉の性の陰陽を正
る 其本勝手といへば陽の体なるゆゑ陽性の葉を言はく陰
性の葉を言はく又非勝手といへば陰の体なるゆゑ陰性の葉を言はく
陽性の葉を言はく挿たりて正しく備ふる時おのづから
性容を以てて全体規則速く調ふのなり 但 陰陽の葉の葉の
形態表より見く左旋なるを陽といひ右旋なるを陰といふなり

〇陽之葉



葉の形態表より見ると中の筋より右の中狭く左の中ひろくなら則左旋の筋なり

〇陰之葉



陰の葉の筋より中の筋より右の中ひろく左の中せまき是則右旋の筋なり

〇萬物北を根元とする理は既先ふつれば弁へ知るべし

右葉の性ふ陰陽を定るもの諸鳥の翼の形容よりして其理を

窮むる

陽



鳥の左の翼羽は此ごとく中の筋より右の中せまき左の中ひろく則右を陽の葉とわれし姿なり

陰



同じく右の翼羽は此如く中の筋より右の中ひろく左の中せまき是まきむるの陰の葉も同一姿也

さへく禽獸草木無限る萬物左を陽と右を陰とくこのゆゑふ左右の翼の羽のまきむるの葉は符合したるを陰陽と定る最陰葉陽葉より地上二叢の中生ひまは暖陽の地は陽の葉多く陰濕の地は陰の葉多く生むる事天巧自然の理なり敢て

僻論を以て争ひたき所也
 尚弓術の甲矢乙矢少くも此陰陽の性理を
 巧く確證めねばならずは爰に首く

○本勝手陽之体五葉之圖



右本勝手の体の葉を主として陰の葉を交たる陰陽全備の風格なり
 但し本勝手は陰の葉を主として挿たる幼學の眼や見時左の
 差別を見ゆるべし此形態を會得したるものより見るとい
 りのなり

○葉の表裏を陰陽とて自然の陰陽の性も及ぶ也
 此早教諭又活花図大成の附録小季著一置つ

○逆勝手陰之体七葉之圖



圖の逆して陰陽の葉を正しく組時花体聊も滞りなく自然正風体ふとのなり



此葉の表裏をたゞ陰陽を混組とて葉荷の重さより見苦しむるのなり鏡をさへて考辨有る

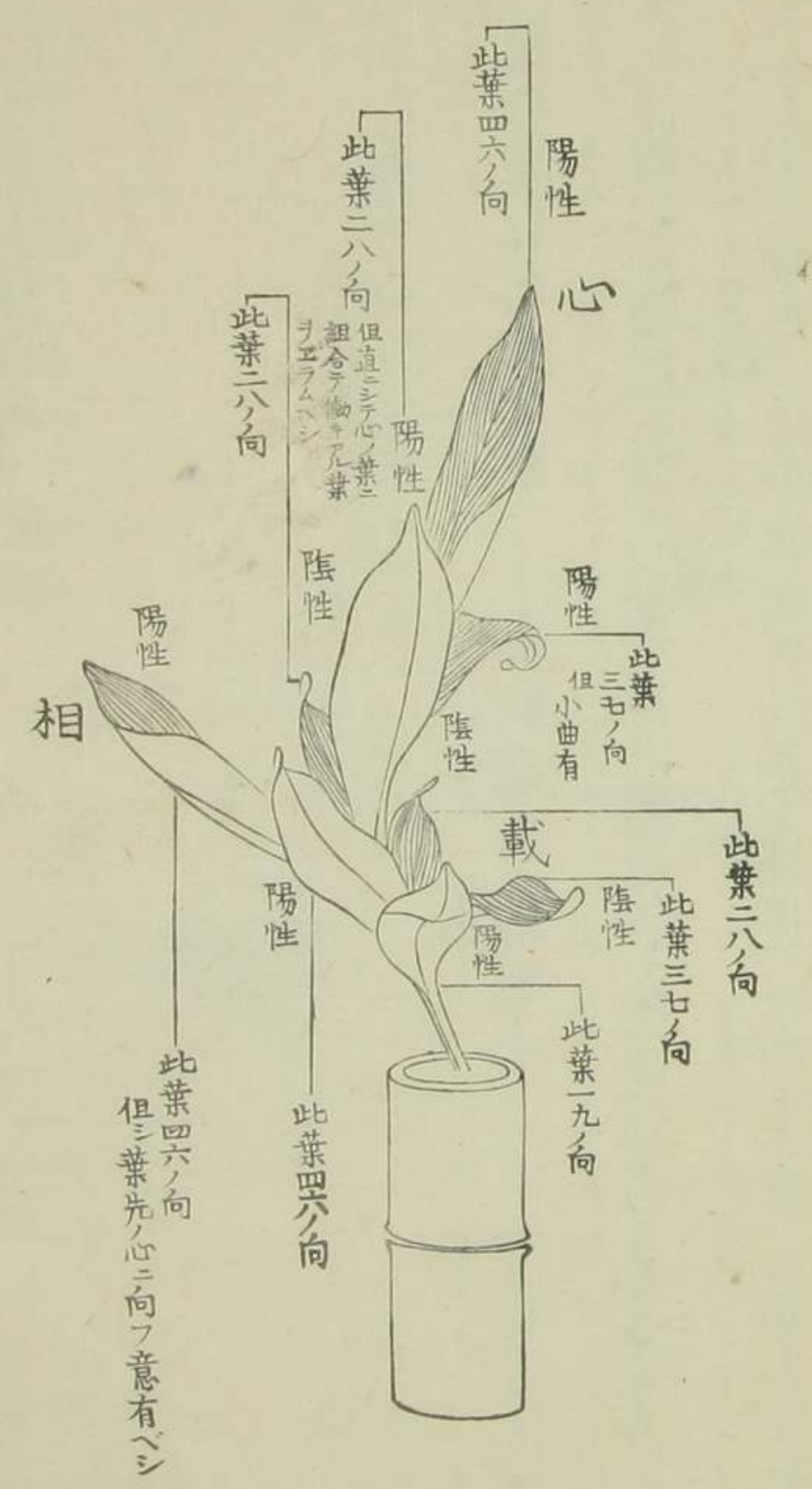
右の七葉小三葉と増したる活体なり
 但し心小三葉載小三葉相小三葉を
 配する事即九葉の定格なり

〇本勝手陽之体九葉之圖

平小見事事を思む最葉小をさすのほろ様遣ふ事肝要也
 葉を真横小見ると真
 葉を重し葉先を曲とさす風の格甚なりたると數葉ゆり入ると曲葉八唯一
 二葉を過自然の容少く惣体過不及
 かく風情を調ふ事を旨とす

一九と二八分平を見よ一分横を見よ
 二八と二八分平を見よ二分横を見よ
 三七一七分平や三分横四六分
 四六分見よ
 四分横や六分の平とす

〇廿五



右葉を組心と相遣ふ葉の大葉中葉をさす也。又載小置葉
 小葉を用ふる事最葉先何れも同方向なるが様心得
 手鍊也

〇活花手引種後編卷之二

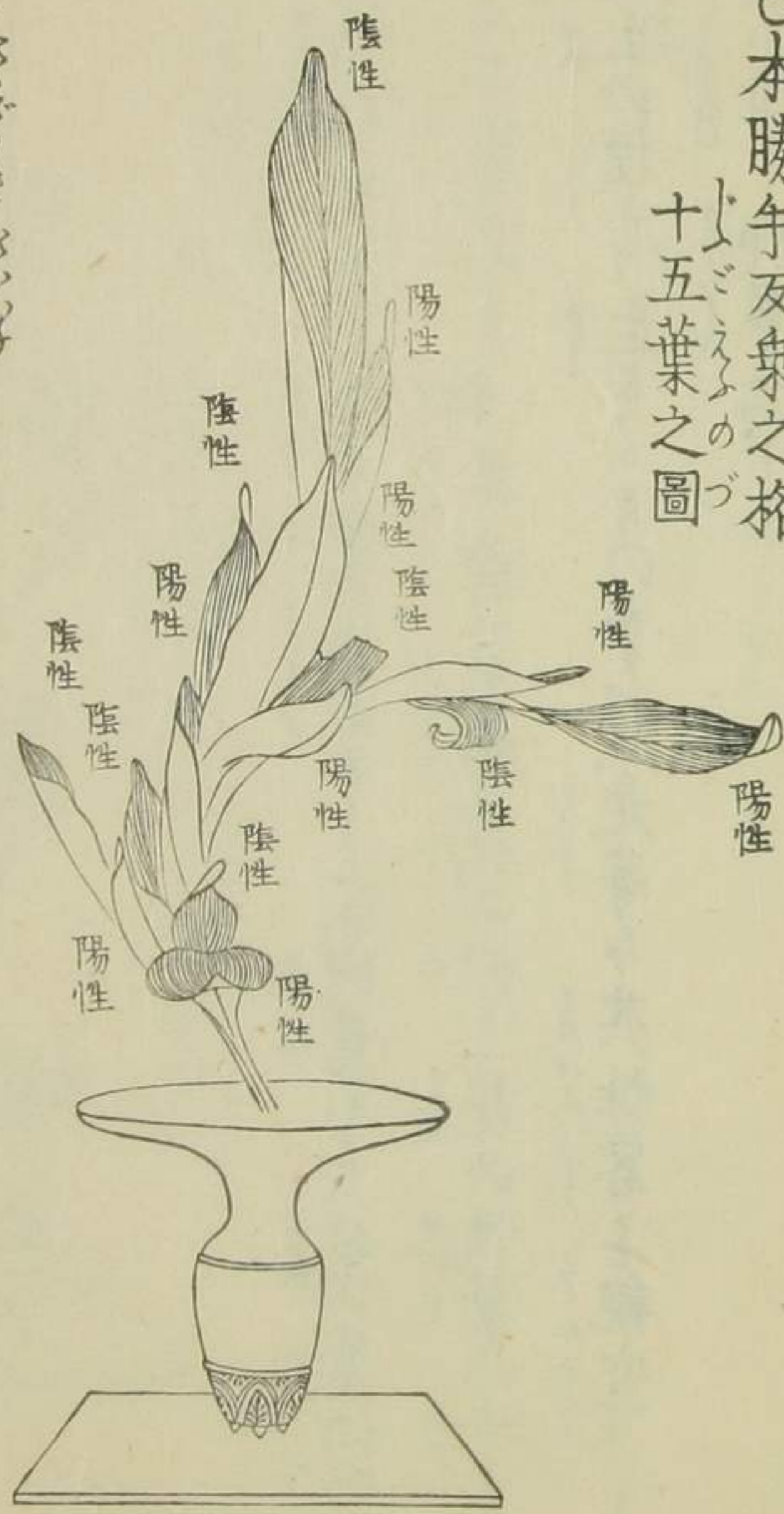
○右九枚ふ二葉増加
 草の次女ふ入たる圖



圖のこゝ挿る体則葉の働さ也

但し陰陽の葉は花体小應一差別有る各圖より會得也又雅整
 體變化の規則小陰の体小陽の心葉を用ひ陽の体小陰の心葉を置事有是と反衆
 の格より充働有体也併手鍊熟せば是と挿得也則十五葉の圖左小記さ

○本勝午反衆之格
 十五葉之圖

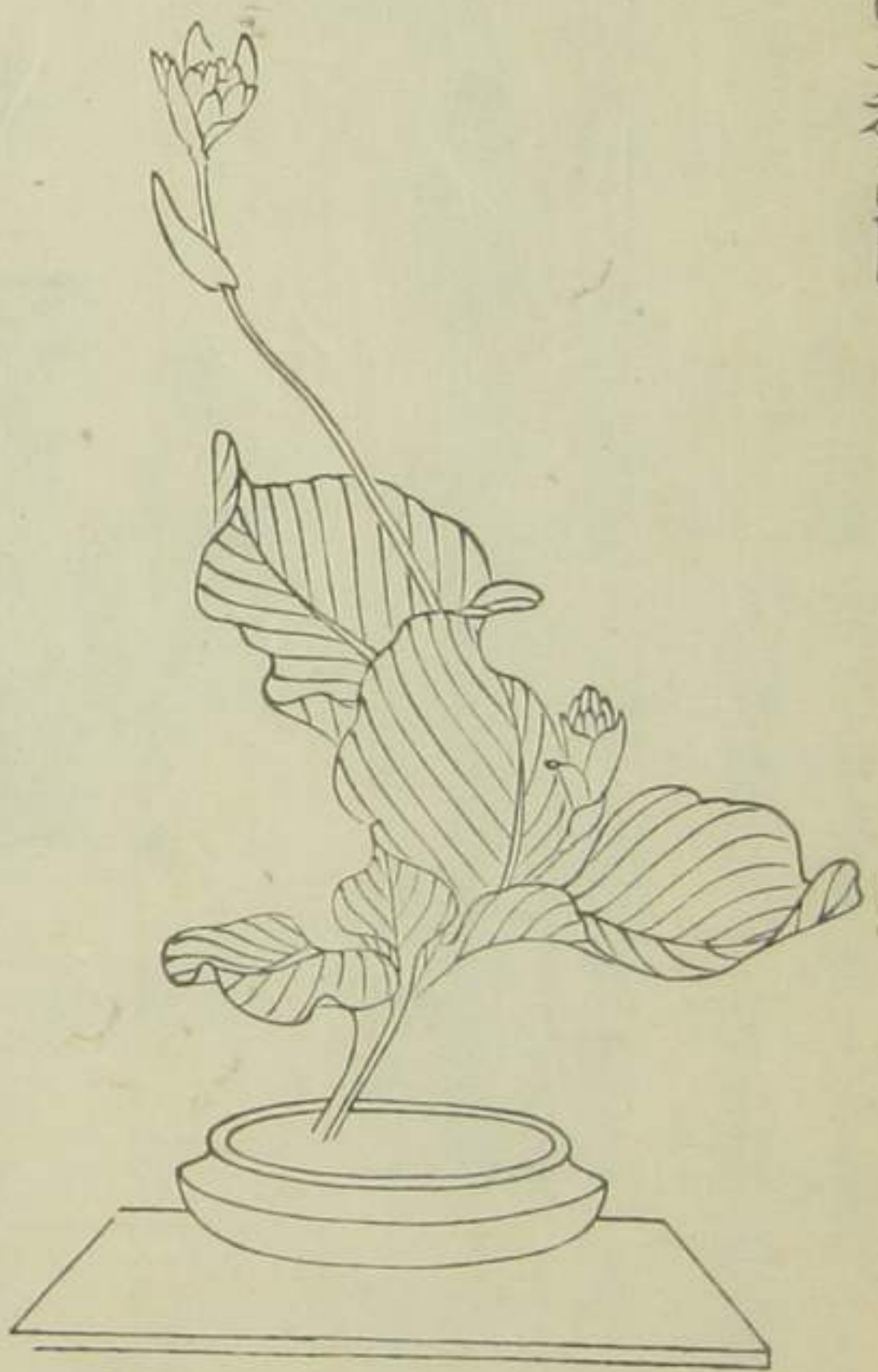


右の葉組唯定規の大旨と

記さるのゆゑ最四候小應一葉の性同く三月の季より四月の始と
 一葉の時此項花と根の旁置又嫩葉を生じ時習有九器小應一
 千變万化極りたるもの也尚季女一葉百瓶圖解と書小花圖數体詳也
 一葉の正字の過文化の始豫及の楠嵐園撰たる百瓶圖譜と書のり百瓶の
 中より尚す五十圖と撰出天保の季年小新又五十圖と撰添旁小其義解と并置たる書なり

○一葉ふ准じりの五種の圖

玉簪花 五葉
ニ花

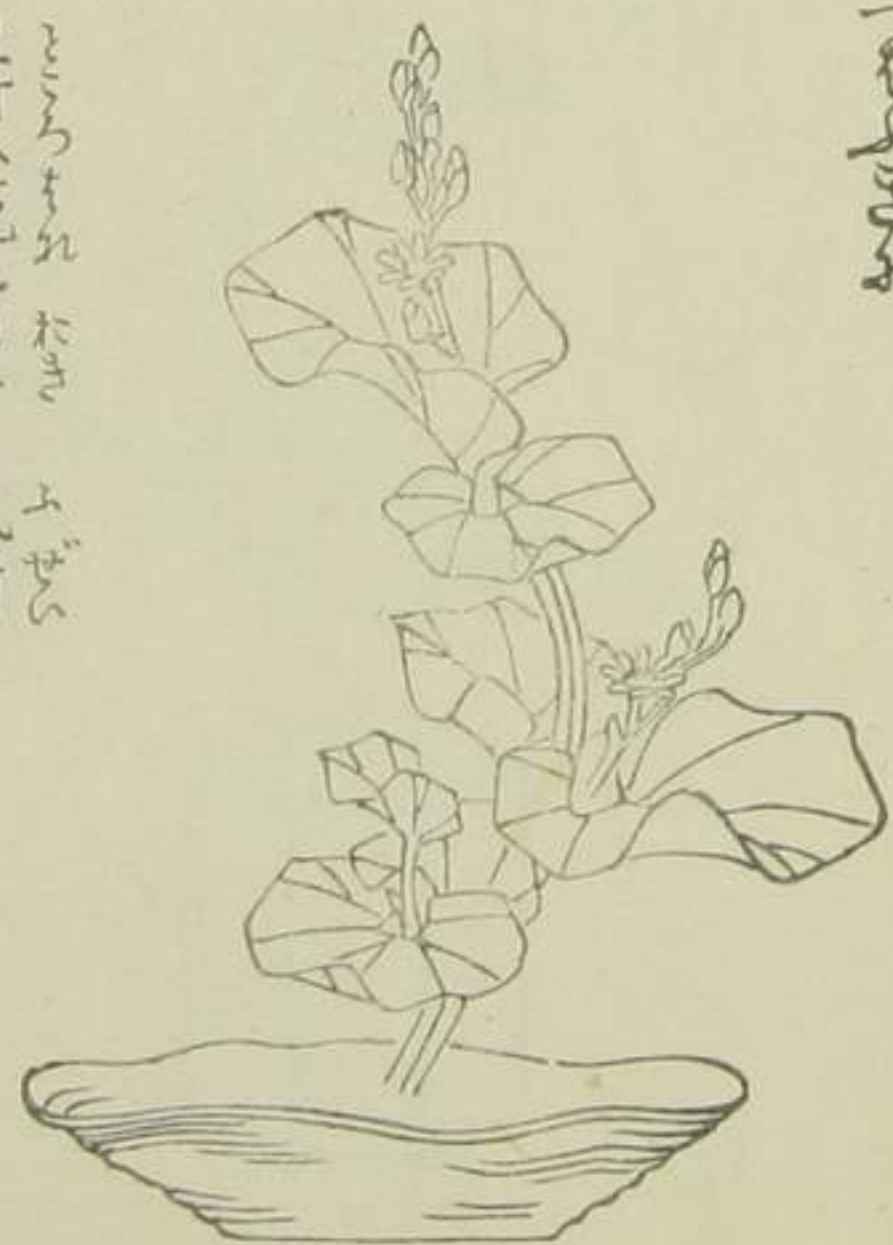


玉簪花紫苑棠吾の類々葉の組方をらん同意をり花の葉の向ひ
合たる中より出さべし但車前の玉簪花に似る花の性葉の中より
生ぜば偶生の傍より生じりものなれば是等々其性容を觀究し
右の葉組ふ准じり挿習ふべし

棠吾 二花
七葉 岡洋蓬杯の大旨此つぎふ
准じり挿習ふべし

紫苑 七葉
三花

紫苑の葉と用ふる所へ花を置く風情と
調ふべし



紫苑の性弱ゆへに葉の
殊に強きと見立
用ふべし



花葉撓方等の早教諭
著しむべし

○曇華だんごいんじんふ准しんじりみのみふりん二本三本五本七本まと挿葉さしての
 自然しぜんをそなへるまきやむるなり。此花仲夏なつより初秋しゅうふりて世よふ
 多く志ちかやや安やすきりの花はない芭蕉ばしやう紅蕉こうしやう等の風情ふうせいを知しる
 まづ是これを以もつて手錬てねんとす

曇華 三阜



此花このはなふ同おな類るいのもの何なんれの葉はの大小だいせう取合とりあへて風情ふうせいを

ををりてて性容せいよう并なら挿方さつほう焼様やう等ら早はやけけふ

蓬莪茂 三帝 七葉



芭蕉ばしやういんせんいんせんせうせう用ようふ
 此風情このふうせい挿さてばし

葉はのはまま様らいんじんいんじんふ
 ひひくく真平まへいと見みる
 事ことは

〇高良薑 良薑 曇華子似く葉厚く強 故ふ葉先靡く
葉の前後のそたきやく七三ふ見る様遣ふべ
何き花回早ゆ
ふまのせり

萬年青性容之事 并 葉組之傳

〇おもと陰性のものみ 隆冬衰へばその壽を以て名とす
専ら慶謙ふ用うもの也 其性容四候こふく餘草ふ勝とたる
所あり 葉の左右たひふ偶生る春心中より苞を萌し 其苞の
中より嫩葉を發す 嫩葉生長さふきたるら苞をこれ
とてひくその苞の内ふ蓓蕾を生し 心中より出るがごとく
見えく 新葉と舊葉の間ふ花をひく 即六辨ゆく黄白色也

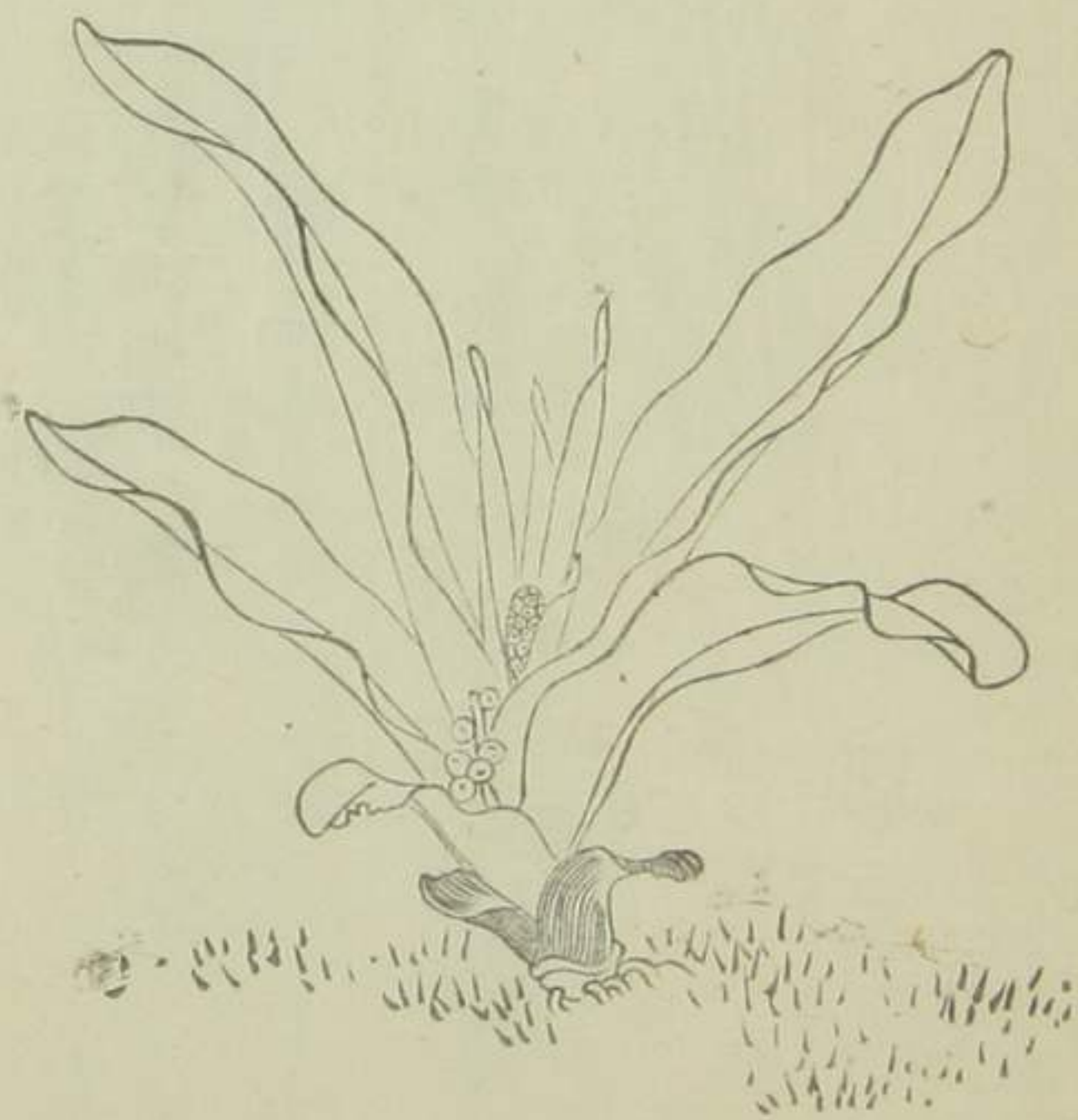
但 辨厚く謝落せり

因ふ云水仙の性 四葉偶生のものみ 心中より葉を
生し 六辨の白花とひく 四葉六辨の陰敷とひく 慶
謙ふ用ひく 仙骨の名も 陰極とて 陽萌の理あり 嚴寒の中ふ花を
見ゆるを 仙骨の名も 陰極とて 陽萌の理あり 祝筵ふ用ひく
新葉立延舊葉ふ嗣 盛つるふねん 實を結ぶ 實を結ぶふ
及ん 即胎中ふ後芽を合む 此 翌年の嗣芽となるを 嗣と絶ず
や 喜事ふ用ひく 祥瑞のなるを 以て 唐山や 慶斗のかきり
口端とて 秘傳花鏡に見えり 實と冬ふ至り 熟さると
舊葉とねやろへ 枯腐さるるのちり とうり ころを
用ひく 挿をさるる

万年青性容之圖

花の新葉と苞との間
これとをいふ

苞二葉なるもの常性也
二葉なるもの初生の
苞も随うて苞蕾を生ずる也
本草新編云人家種此
花更能辟祟云々



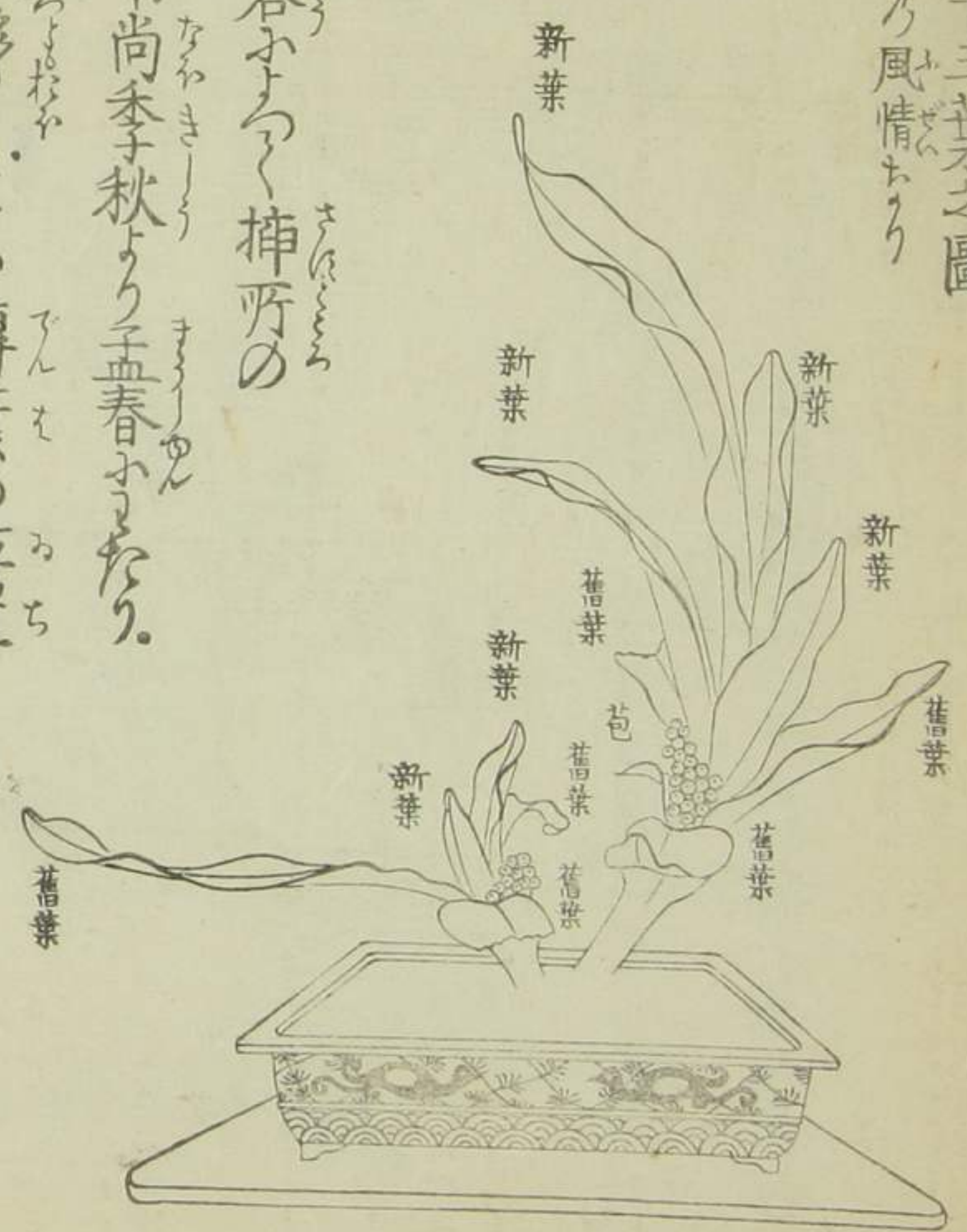
葉の新葉と舊葉や前後左右小年を隔る更り相偶しく生ずるもの
なり。花は是れ葉を組む最上

〇本勝手七葉之圖 花の時の風情をり



圖のごましく性容を委しく辨へ得る瓶中小挿と自然の風
致を調ふものなり。但し花のやまふ枯葉腐葉等とす人挿事
可くなく尚口傳多し

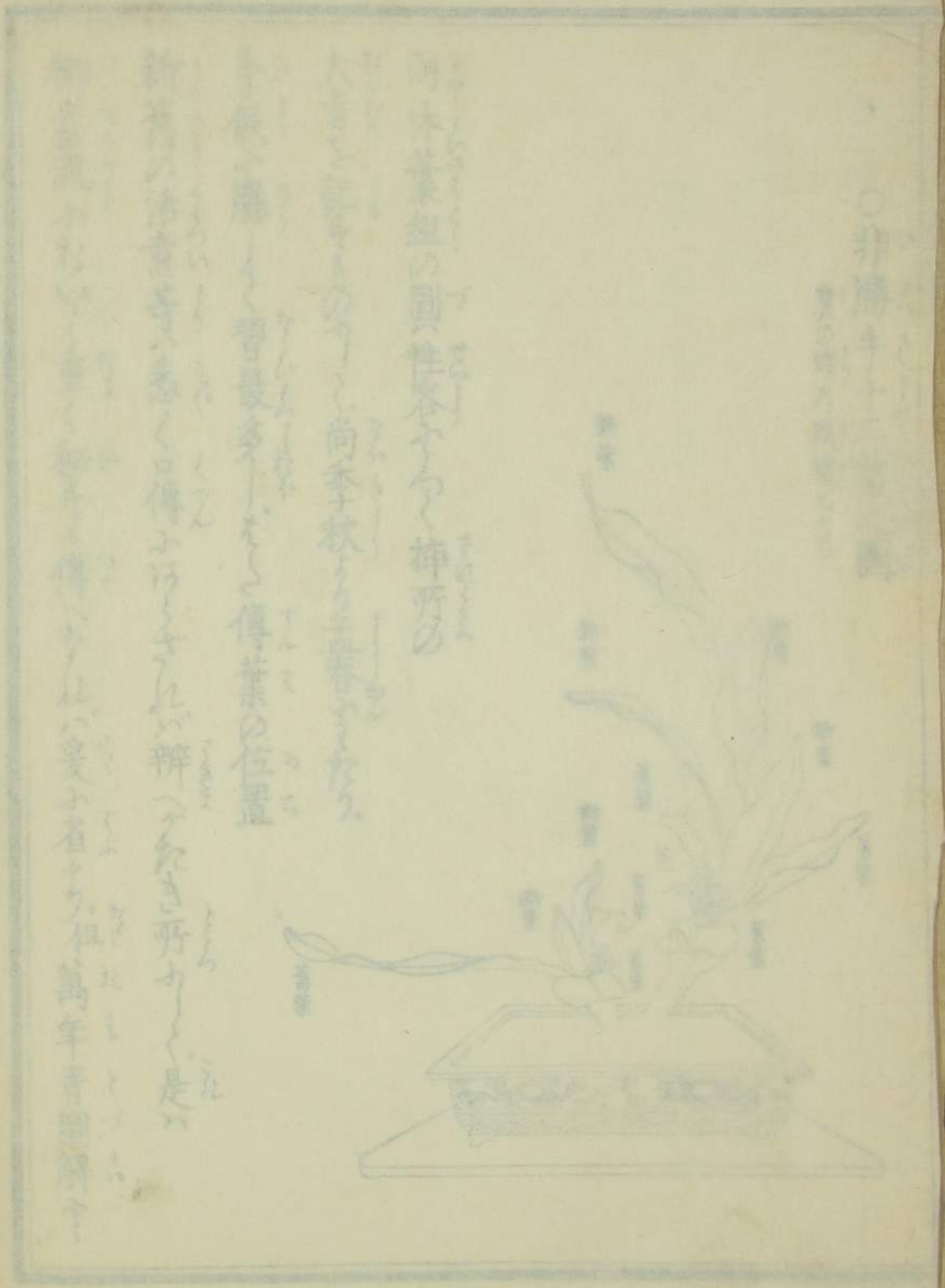
○非勝手十三葉之圖
實の時乃風情あり



兩体葉組の圖、性容ふらぐ挿所の
大旨と記さるのあり。尚季秋より五春ふらぐ。
季候ふ應し習最多し。傳葉の位置
新舊の活意等へ悉く口傳ふらぐ。辨へたき所あり。是の
御當流ふらぐ。重く秘する傳へたれ。爰ふ省せり。但萬年青圖解や

又、舊の葉の規則と著たれ。と聞。形状の大綱と知るべし。
右、舊古真葉の葉と旨と。そのもの。その内、葉萬年青の
二種と。爰ふ著は。常盤木竹の類へ性容悉く。な。は。く。
筆頭ふら。び。た。れ。有。る。但、常盤木の類の葉。方。ま。大。綱。
類。數種繁多。を。以。て。爰ふ。奉。り。附。録。す。餘。ハ。早。敷。論。ふ。著。
と。た。れ。と。競。花。圖。ふ。照。合。し。共。大。綱。と。知。得。し。ん。
青山の花は下風せし。た。く。吹。け。く。ん。千。五。尺。方。版。

治葉手引種及得る二冊



〇書小數体の規則を著しこれをも閱し形状の大綱を知るべし
 右替古專要の葉と音とをみる内一葉萬年青は
 二種を爰ふ著し常盤木竹の類に性容悉く一なるべし
 筆頭ふ及びたゞは省す
 類も數種繁多なるを以て爰ふ擧げ
 〇たゞはそと競花圖小照合し其大綱を知得べし
 青山の花は下風世にたゞ吹けんとせん千五百六万歳

但し常盤木の類竹の挿方等は大旨
 校正活花圖大成の附録小著一置つ
 又水草の
 附録小記一つ
 餘ハ早教諭小著

活華手引種後編卷之二畢

〇活花手引種後編卷之二

瓶花者流各有其插法若心費巧取其姿態
以供衆目之玩賞目謂之活花然而其活者豈
能耐久乎終無不損之時又無不枯之理偶以
其活久者不過十日或二十日久而不久不且以為
久也乎以謂必能耐久任百年而不變者則有
一焉何種插而固之鑄而帖之不論春夏秋冬
冬一花一本皆儲之於帖中雖非其花時而
開帖則其姿態現焉掩帖則其氣跡沒焉以
為有則有之為無則無之不知其真有所謂之



無帥其之蓄其香而少之留其影而遺之畢竟
鏡花水月觀非實相觀之何逐其色香帥
蓋言低疎密之姿繁瘦參差之態即如插者
苦心之所在焉活存斯帖此其活花式也傳之
而志各一觀之不可為式者也予愛瓶花而略插
法又將譽之乃贊一絕以為跋
四時百種巧收儲姿態交妍、永不枯休逸色
香談實相瓶花固好護真如
嘉、水癸丑秋心
春樵隱士



壽采園翁所著活華手引種後篇成仗余淨寫
焉余固不解插花之術然其言醇正殆於懷古之道
豈敢以客所及乎因欣然應其請點竄做字助語
之失而淨寫以贈時嘉永癸丑上浣

舉對園河北真彥識



余寫花式圖自第三紙至十八紙適曾有故而未果遂仗
梅可畫生代寫全其功如生者可謂能彌縫其闕也

蟻生文雄



活花式圖自十九紙至卅紙余所代蟻生兄也用筆陋拙自視
赧然諺云代大匠斲者傷其手此謂乎 梅可畫東舉



